

---

# いしのか

夏のサンタクロース

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
いしの力

【Nコード】  
N2128H

【作者名】  
夏のサンタクロース

【あらすじ】  
神々が作った石。それはどんな願いも叶う石だという。主人公、今河翔は病気の妹を助けるため、伝説の秘霊石を求め、旅立つ。そして、ついに伝説の石を見つけ、旅は終わりになるかのようにみえた。この作品はフィクションです。実際の名、地名、団体等とは関係ありません。

## 旅の終わり、そして始まり

「見つけた。これが、あの、秘霊石」

僕はいつにもなく興奮していた。心臓がばくばくになっているのが自分でもわかる。

「おーい、翔、あつたか？」

「うん」

僕は今河 翔。

いたって普通の小学六年生だ。隣にいるのはクラスメイトの会田光秀、そして、

「ちよつと待ってよ」

この人もクラスメイトで級長を務める小沢 美智子。

この三人で、僕らは伝説の石を求めてここまで来た。この洞窟に。何故僕らがこんなことをしているかというところ……あれは一週間前になる。

いきなりお父さんが深刻そうな顔をして、こう言った。

「翔、静が、静が、不治の病になった」

「病気？治らないの？妹、死んじゃうの？」

お父さんは何も言わない。

「ねえっ、ねえっ」

何度も肩をゆするが、お父さんはそれ以上何も言わなかった。

その晩、泣きじゃくる僕をじいちゃんが慰めに来た。そして、最後にこう言った。

「翔や、泣くな。まだ希望はある」

「えっ？」

「この世にはな、なんでも願いの叶う伝説の石がある。その名を秘霊石という」

「秘霊……石？」

聞いたこともない名前だ。

「そうじゃ、秘霊石。しかしそれは伝説上のもの。あるかわからん。龍や妖怪の類と同じじゃ。それにあったとしても、もう誰かが見つけているかもしれん」

「それでも、少しでも妹を助けられる可能性があるなら、僕行くッ」

「よく言った、さすがワシの孫じゃ。その言葉を待ったよ。ほれ、地図はここにある。うちの古い倉庫にあったものじゃ」

古ぼけていて、だいぶほこりがかぶっていたが、

その地図にはぼんやりと伝説の石のありかと書かれていた。

「さいわい、明日から夏休みじゃ。気をつけるよ。静の命がかかっているとはいえ、無理をはいかんぞ。親には学校の勉強会の長期合宿に参加したとでもいっておこうかの。……本当はワシが行けたら一番いいんじゃないか」

「いいよ、おじいちゃん。おじいちゃんは足腰悪いんだから無理しないで」

「ありがとよ。」

「よし、絶対秘霊石を見つけるぞ」

その晩、決意を固め、一人で燃えていた。

そして、次の日、

「まずどうしようかなあ。……そうだ。友達の光秀を誘おう」

ということで光秀の家へ。チャイムを鳴らすと光秀のお母さんが出てきた。

「あら、翔ちゃん、こんにちば」

僕はあいさつをすると、光秀がいないか聞いてみた。

「光秀ねえ、夏休みの宿題をしに行くとかって言ってね、学校に行つたのよ」

「わかりました、ありがとうございました」

学校に向かいながら、僕は考えていた。

夏休みの宿題かあ、やっぱり、誘うと宿題終わらなくなるよな。迷

惑だろうか？しかし、こっちは人の命がかかっているんだ。頼みこむしかない。

野を越え山を越えると（うそ）、……本当は住宅街をジグザグに進み、道路沿いを真っ直ぐ進むと、着いた。僕の小学校だ。  
ん？グラウンドの中央でサッカーボールを蹴っているのは？……。

「光秀！」

光秀はサッカーに夢中でこちらに気づいていない。もう一度、大きな声で呼んだ。

「光秀！」

すると、キョトンとした顔つきで、いつからそこにいたんだといったげな様子でこちらを見ていた。

「いつからそこにいたんだ？」

案の定。光秀が振り向くとトゲトゲ頭が汗で光って見えた。

「今きたばかりだよ」

「どうしたんだ？俺に何か用か？」

「ああ、実は……」

光秀に幻の石、秘霊石と一緒に探して欲しいと頼んだ。

## 旅の終わり、そして始まり（後書き）

また、連載を始めたいと思います。時間が空いたり、文章が稚拙だったりするでしょうが、何とぞ、お付き合いをお願いします。

## 旅の終わり、そして始まり（2）

「やだよ、そんなのめんどくせー。第一あるかどうかわからないんだろ？夏休みの宿題も終わらないし」

光秀はボールを片付けに入っていた。僕も食い下がるようにについて行った。

「頼む」

「いやだ」

「実は……」

「何だ、何かあるのか、嘘でごまかそうったってそうはいかないぞ」

「実は妹が不治の病にかかったんだ。僕は妹を助きたい。それには秘霊石が必要なんだ。だから……」

この時、僕はどんな顔をしていただろう。

「そんな顔すんなって、わかった、この会田光秀、全力を持って協力させてもらう」

「ありがとう」

「なーに、いいってことよ。それに、伝説の石を求めて、なんて、面白い自由研究に使えるじゃないか」

僕は笑ってしまった。光秀らしい。

「あ、笑ったな、パクるなよ」

「まねないよ」

「ちよつと、その二人」

僕と光秀の話に割り込んできたのは級長、もとい小沢美智子だった。僕が先に反応した。

「級長、どうしたの？」

「今の話、聞いていたわ。人の命がかかるとあっちゃあ、ほっとけないわ、私も仲間に入れて」

「えー、どうする、翔」

「僕はいいよ。人数は二人より三人のほうが心強いし」

「……、あそ、お前ってなんつーかな、お気楽思考な。危ない目に会つかもしんねーんだぞ。仮にも女の子を危険な目にあわせられるか」

「確かに」

美智子は光秀の手をつねった。

「いつて！」

「仮につて何よ。私はちゃんとした女の子よ。それに危ない目にあうかもしれないということは十分承知しているわ。だから私も仲間……」

「いいよ」

「お前なあ……ま、いつか」

こうして三人で行くことに決まった。

そしてそれからが大変だった。何しろ、子供三人で冒険するわけでお金は僕のじいちゃんに渡されたものがあつたが、宿をとる時や船を借りたりその操縦士を雇う時に信じてもらえないことが多かった。そんな中、一人の操縦士に出会った。

「ああ？ 船を借りたい？ 付き添いの大人は？」

僕が応えた。

「いません」

「はっ、馬鹿正直な奴だな。だが大人がいねえのなら、船は貸せねえ。お父ちゃんを連れてこい」

「お願いします。私達には船が必要なの」

級長も頼んでくれたが、貸せないの一点張りだった。次に光秀が、だが。

「頼むよおっちゃん。ほら、金ならこんなに持つてるしさ」

と、光秀が言くと、その人はギロリと僕達を一瞥し、

「ボンボンの道楽かよ、やっぱり船は貸せねえな」

と、もうダメか、と思ったが、理由を説明してみた。すると、意外にも骨を折ってくれた。

「なるほど、そんな理由が。妹のためにあるかもわからない石を探



しにねえ。いい話じゃねえか、よし、金はいらねえ、貸したる。俺は三浦、今度から船借りる時は俺に言え」

「ありがとうございます」

みんなで三浦さんにお礼を言つと、  
僕らの旅が始まった。

そして紆余曲折を経て、無人島に着いた。洞窟の中は暗く、回りの岩は地面も含めてゴツゴツしていた。  
そして最深部に着き、今に至る。

「これ、石というより、砂のようね」

級長が少し遅れて追いついた。

「そうだな。本当にこれがあの秘霊石なのかよ、翔」

「うゝん、どうだろう？でも見て、この砂、懐中電灯に当てるとキラキラ光るよ。たぶんこれに間違いないよ。……それに他にはゴツゴツした岩しかないし」

## 旅の終わり、そして始まり希望

「じゃあ、これを持って早く帰ろうぜ」

僕は秘霊石と思われる砂を布の袋に入れた。

「えゝ、せつかくの無人島なんだし、私はもつとゆっくりしていきたいけどな」

「蛇とか巨大ゴキブリとかうようよ出るかもよ？」

「キヤー、早く帰りましょ」

「アハハハ」

僕は笑いながらも内心嬉しくて、たまらなかった。

こうして笑いあえる仲間がいることもそうだが、それ以上に妹の命を救えるということに。

そうして家に向かつて出発した。三浦さんも一緒に喜んでくれ、僕達の旅は終わりになるかのようにみえた。しかし、この時僕達はまだ気づいていなかった。このことが終わりではなく、始まりに過ぎないということに。

家に着いて一週間がたった。その頃から僕はある異変に気がついた。……おかしい。僕はじいちゃんのもとへ行った。

「じいちゃん、秘霊石を手に入れたのに、妹の体の調子が良くなるじゃないよ」

じいちゃんは焦りと不安でいっぱいの声でこう言った。

「お、おかしい。それが本当の秘霊石ならば静は良くなるはず。これは……一体？」

「僕、僕、どうすればいいの？」

「落ち着け、まだ希望はある。紺城こんじょうさんの家へ行け、昔、伝説の石について語り合ったことがある。手掛かりになるはずじゃ」

「じいちゃんの希望は当てにならないよ」

僕は悲しみを押し込めることが出来ず、その場を逃げ出した。

そして翌朝、しばらくボーっとして何も考えることが出来なかった。

少ししてから夏休みの宿題を終わすため、光秀を誘って学校に行くことに決めた。

そして、光秀の家。

「すみませーん、光秀君いますか？」

ダダダダ、二階から急いで階段を降りてくる音が聞こえた。

「おゝ、翔じゃないか、どうしたんだ？」

「宿題終わってないだろ？一緒に学校行かない？」

「おう、いいね。俺もそうしようと思ってたところ。じゃあ、準備するから待つてろ」

そして、光秀がきて、学校へ向けて出発した。

「なあなあ、それでお前さあ、静ちゃん、良くなったの？」

「うっん、全然」

「……、そうか、でもそのうちきつと良くなると思っぜ」

「……………、うん」

光秀は心配そうに僕のほうを見つめていた。バンツ。後ろから誰かが、僕と光秀の肩を叩いた。

「お二人さん」

いつもどりの三つ編み姿で登場したのは、

「あつ、美智子じゃん。お前だけ妙に明るい奴」

「二人とも妙に元気ないよあゝ。どうしたの？特に翔」

「級長。別に……。何にもない」

「そう？ところで知ってる？こんな噂。最近私達の山蔭小で喧嘩を売りまくっている男子がいるのよねえ」

僕は思わずゴリラのような怪力男を想像した。

「あ、翔笑った、良かった、元気取り戻せたみたいで。……あ、で、その子、紺城 怜君れいというらしいんだけど、あんた達も気をつけなさいよ」

「ああ。ん？どうした翔？」

紺城、怜？どこかで聞いたような……。

まだ希望はある。紺城さんの家へ行け

「あつ、もしかしてじいちゃんが言っていた……」

「心当たりがあるのか、翔」

「うん」

## 怜君（前書き）

伝説の石を手にいれたが、妹の病気はよくなる気配をみせない。  
じいちゃんに伝説の石について何か知っている人物、紺城さん家  
に行けと言われるも、そもそも伝説の石なんかないのではないかと  
思いはじめた僕はじいちゃんに、当てにならない、と言い放ち、  
その場を逃げ出した。  
そんな中、同級生の、紺城怜という名を耳にする。

### 主な登場人物

翔……小六で主人公である僕　光秀……僕の親友　美智子……学校の級長を務めている

## 怜君

「とりあえず、怜君に会ってみたい」

「え」

びつくりしたような大きな声で二人とも同時に言った。

「何でだよ、俺は会いに行かねえぞ」

「伝説の石に関係があるかもしれないんだ」

「そうか……」

光秀は少しの間、考えていたが、やがて、

「ならしょうがないな」

「良かった」

「美智子も行くよな！」

級長は間髪いれずに即答した。

「私は遠慮しとくわ。あんた達、怜君の怖さを知らなさすぎる。…

…ホント、ひどい噂なんだから」

僕が級長の方を見ると、いつもの級長では考えられないくらい青ざめた顔をしていた。

「何だ、美智子、前は危険を承知でついてくつつつたのに」

「今回のそれは別よ。……、とにかく私は行かない。あんた達の幸運を祈ってるわ。じゃあね」

そう言つて級長は早足で行つてしまった。

「なんでえ、あいつ」

「まあ、無理強いは良くないし……」

……そして学校。

「よし、じゃあ怜君を探しに行こう」

「チツチツチツ」

光秀がお前は甘いなといわんばかりの顔で指を振った。

「何だよ」

「これだから翔、お前は。いいか、このまま直接会うのは美智子が

言っていた通り、危険だ。噂つてのは全くの嘘か、または嘘の入っている本当か、もしくは本当か、のどれかだと俺は思う」

辞書でひいたかのようなことを言い出した。いや、光秀のことだ、かつこつけるため、先に辞書でひいていたのかもしれない。

「それで？」

「だからな、まず俺が今日一日怜について調べてみる。それで明日、会ってみるってのはどーだ？」

「いいけど、それなら僕も一緒に調べるよ？」

「いや、お前は足手まといだ。俺一人で調べる。お前はいろいろ考えたいことがあるだろ？今日は家で休んでろ」

そう言くと光秀は脱兎の如く去って行った。

「はやっ！ちよっ、待っ……。はあ、まあいいか、僕は僕で調べてみよう」

どこに行こうかな？

そうだ！怜君家に行ってみよう、じいちゃんなら場所がわかるはずだ。

……それにはまず謝らないとな。

そして家。

「じいちゃん、ごめん。僕、やっぱり、希望があるなら、妹を救うことを諦めたくない。紺城さん家、教えて」

「いいんだよ。ワシにはこうなることがわかつた。お前は優しく、妹思いの子だものな。よし、じゃあ紺城さん家を教えよう」

その後、紺城さん家を教えてもらったが、何度も迷い、何回も人に道を聞き、やつとのこと<sup>たど</sup>で辿り着いた。

この辺、迷路みたいだなあ。

「すみませーん、誰かいませんか」

声をかけると、すぐにおじいさんが出てきた。

「はいはい、おや？どなたかな？」

「僕、今河翔といいます。ちよつと、尋ねたいことがあってきました」

「今河、今河……。あつ、もしかして与吉さんのお孫さんかな？」

「あつ、はい」

「これはこれは。この辺り迷路のように入り組んでいてさぞ、大変だったことでしょう。中に入ってお茶でもどうぞ」

「あつ、ありがとうございます」

そうして、中に入れてもらった。中にはアンティークな時計や、アンティークな椅子等、とにかくアンティークなものがいっぱいあった。アンティークグッズにみとれていると、紺城さんはお茶とお菓子を持ってきてくれた。

「……で、翔君は何について知りたいのかな？」

「伝説の石って知っていますか？」

その言葉を言った途端、紺城さんの目の色が変わったように見えた。「ふむ、成る程。どこからお話ししたらよいかな。翔君、君はどこまで知っているんだい？」

「えっと、秘霊石で願いが叶うとしか……」

紺城さんはお茶を一口、口に含むと、湯飲みをコトン、とテーブルに置き、話し始めた。



怜君（後書き）

ただいま前書きを頑張っております。

怜君、怪物！？

「成る程。実は伝説の石は四種類あるのです」

「えっ、そんなこと、じいちゃんに聞いてない」

「今から話すことは与吉さんと語り合った後、私が独自に調べたものですから」

「そうなんですか、それで」

僕も湯飲みを口に近づけ、一口飲んだが、話しに夢中で、僕が、猫舌だということを忘れていた。

「熱っ」

紺城さんは麦茶の方が良かったかな、といいながら、テーブルを立ち、麦茶を持ってきてくれた。すみません、お手数かけます。

紺城さんはコホン、と軽く咳払いをすると、話し始めた。

「そう、伝説の石は、無結晶、劣聖石、秘霊石、神聖石とあります。昔々の話になりますが、遙か昔、宇宙が出来る前の話。神々は神を襲う強大な怪物、ダイオスにほとほと困り果てておった。そこで、北、南、東、西の四大神が集まり、その全ての力を使い尽くし、何でも願いの叶う一つの石を作った。それが、神聖石なのです。そして神達はその石でダイオスを倒そうと考えた。しかし、その時にはダイオスは神の勇者、マグカイルによって倒されていた。その後すぐに神聖石をめぐる争いが始まった。無結晶はそんな争いを嘆いた女神達の悲し涙だと伝えられています。ちなみに秘霊石は、神が、劣聖石は天使が四大神の神聖石を真似て作ったものだと言われています」

「へー、そうなんですか」

「そして神聖石は一つ、秘霊石と劣聖石は各地に、無結晶は一カ所にたくさんあるそうです」

「へー、それで？それで？」

「申し訳ないが、こんなことぐらいです。私が知っているのは」

「いえ、とても役に立ちました。ありがとうございます」

「ホッ、ホッ、ホッ。こんな老人でも役に立ったと言われると、嬉しくなりますよ。すまないね。…孫の怜ならもつと知っているかもしれないなあ。あの子はさらに調べ上げていたからなあ」

「えっ、お孫さん、やっぱり怜君なんですか？」

「ええ、そうです」

「あっ、ありがとうございます」

そう言って、僕は怜君宅を後にした。

「あっ、これ、翔君、お茶もお菓子もまだまだ……、フツ、せっかちなのは与吉さんに似てるな」

へへっ。また一歩進めた。怜君に早く会いたいな。期待を膨らませて今日は家へ帰った。

そして翌朝、学校に向かう途中、光秀に会った。

「よう、翔。今日は一段といきいきしてんな。」

「まあね。ところで、怜君についての情報はどうだった？」

「ああ。昨日学校で一日中調べた結果、重大なことがわかった」

光秀が真顔になった。つられて、僕も真顔になる。

「実は、あいつは……」

「うん」

僕は思わず唾を飲みこんだ。

「モテるんだ」

「は？」

そこで一種の沈黙が続いた。僕の聞き間違いじゃないか、と思ってもう一度聞いてみる。

「何だって？」

「だ、か、ら、モテるんだよ、怜の奴は」

「……それで」

「それだけだ」

フツ、思った以上に使えない男よの、会田光秀。とか思いながら、

一応、つつこんでやった。

「……それ、重大でもなんでもないから」

「だってよく、悔しくねえか、翔く。俺達モテねえ奴にとってはよく」

光秀は泣きそうな声で言った。

「君と一緒にするな。……他に情報はなかったの？」

少しキレぎみの僕なのであった。

「はうつ、疎外された。俺達は親友じゃなかったのか……………」。

…、まあいいか、いや、良くねえけど」

どっちだよ。だが、立ち直りが早いのは僕が唯一認めるコイツのいい所だ。

「それで？」

「ああ、他には相手が誰だろうと攻撃する、とか、相手の心を読むとか」

「心を読む？」

それって、伝説の石に何か関係があるのかな？

「あとなく、驚いたのが、口が裂けてて、どんな物でも食うらしい。そして耳が四つあって、一キ口先の話まで聞こえるとか、そして足が三本、手が八本、それで様々なことが出来るとか」

僕は額に手を当て、しばらくどう反応すべきか考えていたが、結局、  
「妖怪か！」

奴の頭を力の限りどついてやった。

## 怜君の登場！

「いったあゝ、お前のチョップは殺人的なんだよ、翔」

光秀は涙目で頭を抱えている。大げさな。

「いや、でも俺の情報収集能力は確かだぜ」

「噂よりも君の情報収集能力の方が怪しいよ」

僕はため息をはき、空を見上げた。今日は雲のない快晴だ。目を閉じると、車が近づいたり、遠ざかったり、それと、さっきから光秀が綱ごしに蹴っているサッカーボールの音が聞こえた。そして、目を開く。

「こつちも伝説の石についてわかったことがあるんだ」

「えゝ、何だよ」

僕は紺城さんに聞いたことを全て光秀に話した。

「伝説の石が四種類も？へゝ、じゃあ俺達が手に入れた石って何だったんだろうな？」

「何って、秘霊石でしょ？……あつ！」

「そうだよ、地図には伝説の石としか書いていなかっただろ？」

今、思い出した。紺城さんは神聖石が願いの叶う石だと言っていた。秘霊石ではおそらく、願いは叶わないのかもしれない。そして、僕の持っている石、それは、秘霊石ですらないのかも知れない、というこ

うこと。少し、わかった気がする。

「でもまだわからないことが多いな。僕の持っている石には何の力があるんだ？伝説の石っていうくらいだから、何かありそうだけど。とにかく、怜君に会えばもっとわかるはずだ」

「そうだな、推測してても始まらねえもんな」

……そして学校へ着いた。

僕は光秀とまず、怜君のクラス、六年C組に行くことにした。行ってみると、クラスの中には、数人残って勉強している人達がい

た。

「すみませーん、怜君知りませんか？」

すると、怜君は図書室に行ったという。お礼を言い、図書室へ行く  
と、図書室委員がカウンターで本を読んでいた。辺りをキョロキョ  
ロ探しても、怪物らしき人は見当たらない。みんな本好きの読書っ  
子ばかりだ。

「おーい、そのポツチャリメガネの図書委員、怜の奴知らないか  
？」

と光秀が聞くと、今度は音楽室に行ったという。

早速行ってみると、

「誰もいねえ。」

「どうなっているんだろう？」

「全くだ、こーゆうの、タライ回しっていうんじゃないっけ？」

僕と光秀は少々疲労ぎみだ。

その後、学校中を探してみたが、とうとう会えず、C組に行くと、  
帰った、と言っていたので、僕達も帰ることにした。

そして、帰り道でのこと、

「あゝ、何で会えねえんだよ。怜の奴、俺らを避けてんじゃないかねえか  
？」

「まさか」

この時、背後に視線を感じて、僕と光秀は振り向いた。

「誰が逃げてるって？」

「まさか、お前が……」

「そうだ、俺が紺城怜だ。俺のことを探し回っている二人組がいる  
って聞いてどんなゴツイ不良かと思えば、こんな優等生とトンガリ  
とはな」

初めて怜君を見た印象は僕が想像していた筋肉ゴリラとは全く違っ  
ていた。きつしゃな体で髪は胴まで長く、ゴムでひとくりに束ね  
ていた。

身長も高校生ぐらいあるんじゃないかって程で、声も声変わりして

ないのか、驚く程綺麗だった。

モテるのも頷ける。

「誰がトンガリだ！」

光秀は反発した。

「お前しかいないだろ。ところでお前ら、俺の噂を聞いて俺を探していたんだろ？ だったら、腕にそうとうの自信があるってことだな、ボーツとしてないでかかってこいよ！」

まずい、臨戦態勢だ。完全に誤解している。

「いや、違うんだ、怜君」

「こないんだったらこっちから行くぜ！」

話を聞く耳もたない、といった感じた。

怜君は真っ直ぐこっちに向かってくる。僕があたふたしていても向かってくるのは止めなかったが、光秀の、

「やめろっ、怜！」

という言葉に逆上したのか、僕から光秀の方に攻撃対象を変えた。

「気安く、俺の名を呼ぶな！」

怜君のパンチが光秀に炸裂するかって時に僕はある言葉を発した。

## 伝説の石（前書き）

伝説の石を手に入れるも、妹の様子は良くない。

翔は伝説の石に詳しい人物、紺城さんに会いに行き、伝説の石は4種類あることが判明。しかし、それしからず、結局、さらに詳しく知っているという孫（僕たちにとっては同級生）の紺城怜君に会いに行くことに。

学校中をさがしたが、見つからず、帰り道に声をかけてきたのはなんと怜君だった。いつも、けんかをうっているらしい怜君は僕たちにも殴りかかってきた。

### 主な登場人物

翔……小六で主人公である僕  
光秀……僕の親友  
美智子……学校の級長を務めている



## 伝説の石

「伝説の石！」

間一髪、光秀の鼻先で怜君の拳は止まっていた。

怜君が僕の方に振り向く。

「何だと？」

僕は言い直した。

「伝説の石って知ってる？」

「で、伝説の石……」

”伝説の石”と聞いて明らかに怜君の表情が変わった。

「ま、まさか、お前らは能力者？」

光秀は怜君のすんでのパンチに口をパクパクさせていたが、ようやく、まともに口を開いた。

「能力者だと？お前は何を知っているんだ、怜」

「フ、フ、とぼけているのか？」

怜君の額からは冷や汗らしきものがでている。

「怜君、僕らは願いが叶うといわれている、伝説の石を探している」

怜君は相変わらず黙ったまま、こちらを直視している。

「そして見つけたんだ。実は今持つてる。秘霊石を。ほら、翔、見せてやれよ」

僕はあの無人島で手に入れた、秘霊石？をカバンから袋ごと取り出すと怜君に見せた。

「成る程。フ、フハハハ。そういうことか。お前らは何もわかっていない」

僕と光秀は一瞬、顔を見合わせた。

「どういうことだ？」

「お前らに教えてやる義理も義務も必要もないが、ここまで辿り着いたんだ、石について教えてやるよ！」

「ありがとう、怜君」

怜君は上からものを見る目になると、

「フンツ。全く笑わせる。お前ら、そのお前らがいう秘霊石で本当に願いが叶ったか？」

「そつ、それは今から叶うだろうよ」

光秀は確信が持てないのだろう。ちなみに僕も確信は持てない。むしろ叶わないんじゃないかという考えの方が強い。

「トンガリ、お前は本当におめでたい奴だ。そっちの優等生はわかっているみたいだぜ」

「そうだ、お前の考えているように、この石では願いはかなわん。どうしてだと思う？」

「それは、伝説の石には四種類あるから？」

「さすが優等生。トンガリとは訳が違う」

何だと、このつ。と光秀は小さな声でそう言ったが、それ以上は我慢してくれたようだ。助かる。肝心なところを聞き逃すわけにはいかない。

「その通りだ。詳しく話せば、それは伝説の石の一つ、無結晶だ。無結晶の力は能力を消す、それだけだ」

僕は聞いているうちに一つの疑問が浮上した。

「さつきから聞く能力や能力者って？」

「だからそれを今から説明する。だいたい伝説の石っていうのは能力に関するものなんだ」

「えっ、じゃあ願いを叶えられる石なんて存在しないの？」

僕は心の中で何かが崩れゆく感覚を得た。と、同時に泣きそうになった。

「だから、最後までよく聞け！さつきも言った通り、伝説の石ってのは能力を手に入れるもの。だが一つだけ例外がある」

「それが神聖石……か」

「トンガリにしては物分かりがいいな。そうだ、神聖石はひとつだけ願いを叶える石なんだ」

やはり、思ってた通りだった。

「能力、と言っていたが、具体的にどんななんだ？」

「例えば、劣聖石の場合、手に入れたのが行く力だとすると、何処へでも行くことができる。つまりワープできるんだ。そして秘霊石はさらにその能力をアップさせるものだ。無結晶と神聖石は……さつき言っただけ」

……、凄く曖昧でわかりづらい。光秀の方を見ると、……うん、彼も分かっているようだ。片手を顎にあてて悩んでいた。

そんな僕らを見て、怜君は

「まあ、能力を手にいれれば分かる」

伝説の石（後書き）

2010.11.13  
前書き更新しました。

## 伝説の石く地図

他にもいろいろ質問した。怜君は能力者なのか、とか、神聖石はどこにあるのかとか。仲間になつてはもらえないかとか。

なぜそんなことを聞いたかというところ、もし、怜君が能力者であるのなら、協力してくれれば、これ以上心強いこともないし、僕ら二人は（いや、少なくとも僕は）能力に興味がない、というよりむしろ普通の人でよかったわけで、神聖石が手に入られるのであれば、直で行った方が早いからだ。

だが、そんな甘いものではなかった。

「俺は能力者だが、リミットルームすら使えないお前らと組する気はない」

とか、

「神聖石の場所を知っていたら俺がゆうに手に入れている」

とか、全然甘かった。

そつだよな、とか思いつつ、お礼を言つて、去ろうとした時、

「ちなみに、神聖石の力を手に入れるには能力者であることが、絶対条件らしい」

と、言われ、能力者になることを余儀なくされた僕だった。それとリミットルームについて聞いたかつたのだが、恐らく能力に関係するものだろう、聞くにはまだ早いかなどと思い、それに怜君もこれ以上は疲れるだろうと思い、今日のところはお礼を言い帰ることにした。

そして次の日、僕は光秀の家へ向かった。電話もしたのだが、何ぶん電話に……くだらないダジャレになりそうだったので、これ以上言うのはやめた。

玄関先でチャイムを鳴らし、大きな声で、

「みっつひで君」

と呼ぶと、ダダダダ。いつもの、二階から降りてくる音が聞こえた。

「よう、どうした」

光秀は今起きたのか、パジャマ姿に寝ぼけまなこ、ついであくびまでする始末。僕は呆れながらも

「どうした？ じゃないよ、早く伝説の石を探しに行こう」

「お前、場所分かるのか？」

「あっ！」

しまった。それを計算に入れてなかった。

「だろ？ どうしようもねえじゃん」

「ちよつと待つて」

僕はもう少しで何かを思いだしそうだった。……そうだ！

「無結晶の地図は家の倉庫にあったんだから、まだあるかもしれない。一緒に探してみようよ。」

「分かった、じゃあ準備すつからそこで待つてろ」

……そして十分後。

「よし、行くぞ」

そして僕ん家の倉庫に向かった。

「翔、あったか？」

「うゝん、ないなあ」

ガサゴソと探すものの、地図らしきものはみつからない。みつかったのは、昔の錆びた刀やら、ボロボロの絵やら。

たまに猫やコウモリの赤ちゃんが出る時もあるのだが、今回は出なかった。まあ、じいちゃんが定期的に掃除しているからな。

二階もあるというのに、三時間でまだ一階の一部分しか探せてない。今日中に全部調べきれんだろうか？

……そして日の光も力を失って倉庫の中はだいぶ暗くなっていた。

「ハア、ハア、こりゃあねえぜ、翔」

「諦めんなよ光秀。また明日調べよう」

「そうだな」

「この地図以外に本当はないのかなあ」

僕は、無結晶の地図を拡げたまま外に出た。

日が沈んで暗くなっていたのではなく、それは軽く、雨が降っていたからだった。

「おい翔、地図、濡れてるぞ」

「あつ、やばっ」

そして急いで僕の家の中に入った。

光秀は地図を見ると、

「おい、貸せ」

と、僕から地図を奪いとり、雨の中に入って行った。

「そんなことしたら地図が……？」

光秀は地図を拡げたままじっと見ている。

「翔、これは……」

肩を震わせながら地図を見ている光秀を不思議に思いながら後ろから光秀の持っているそれを覗きこむと、なんと、地図が日本地図に変わっており、複数のマークが追加されている。

僕達が行った無結晶の場所には三点リーダーのマーク、他には太陽のマーク、四角のマーク、山のマーク、があった。太陽や四角のマークはたくさん点在していたが、三点リーダーと山のマークは一つずつしかなかった。

## 伝説の石く地図（後書き）

すみません、だいぶ遅れました。次はもう少し早いペースでうてるかなあ。



## 伝説の石く洞窟

「こ、これって」

「そう、そうだよ翔。これは全ての伝説の石、そのありがた」

雨で濡れて何故地図が変化したのかはわからないが、（特殊なインクなのかもしれない。）とにかく、ここからが本当の始まりだ。

「やったな翔、ヘーイ」

雨の中、僕は手のひらを合わせ、叩きあつた。

「太陽と四角ってなんだろう」

「さあ？でも三点リーダーは俺たちが行ったところだから、無結晶だよな」

「ってことは山は神聖石だね」

「ああ、一つしかないからな」

僕らは着替え、（光秀には僕のを貸した）濡れた体を拭きながら話していた。結局、太陽と四角はわからなかったので、怜君と連絡をとることにした。

じいちゃんに紺城さん家の電話番号を聞き、電話をかけると、真っ先に怜くんが出てくれた。

そして、地図のことを話した。

「成る程、太陽と四角について教えて欲しいと。……甘ったれるな！」

光秀にも聞こえるのではないかと言っほどの大声だった。やはり聞こえたのか、光秀は俺にも聞こえるようにしろ、と勝手に電話のボタンをひとつ押した。

「え？」

「俺はな、ほとんど自分で調べた。危険なこともあつたさ。だが、それを超えて能力者になったんだ。俺はお前らに聞きたい。所

詮、そのレベルなのか、と」

「なんだと怜づ。こつちの事情も知らないくせに！」

光秀が割り込んできた。話をややこしくしないで欲しいなあ、もう。  
「なんだ、トンガリもいたのか。お前らの事情なんて知らないが、俺を仲間にしたくば、最低限、能力者になってみせる」

僕はその言葉に身震いした。……怜君はかつこいい。

「わかったよ。怜君。まず、僕らの力でなんとかする」

「フツ、そうか。勝手にするといい」

僕には怜君が嬉しそうに微笑する姿が頭に浮かんできた。

明日、一番近い太陽のマークのある島に向かう事にした。島の名前を本物の日本地図と照らし合わせたからバッチリ！

何故太陽のマークかというところ、どうせ劣聖石か秘霊石なのだから、光秀が、太陽に行こう、と決めたからだ。

そのうち能力が手に入るのは劣聖石のみ。

はたしてどちらが手に入るやら。

そして、翌日。

僕は光秀ん家に向かった。

「旅費もおじいちゃんに貰ったし、よし、出発だ」

「……と、言いたいところだが」

僕はノリ気だったのだが、光秀の一言で一気にテンションが下がってしまった。

「何だよ、光秀」

「実は美智子が以前に、冒険するときには私も連れてって、って言うていたんだけど、どうする？」

「いいんじゃない。二人より三人の方が心強いし」

「またそれか、お前。……まあ、俺はいいけどよ」

そうして級長も連れて行くことになった。

「よし、今度こそ、出発だ」

「お」

「イエーイ」

級長は冒険に行くとき、やけにテンションが高い。……いや、いつもか。

ところで、級長の格好だが、ハイキングウェアに大きめのリュックサックという、何か少し勘違いしているんじゃないか、といえる格好だったが、まあ、あえてつつこまなかった。以前もそうだったしね。

……そして。

「たぶん、この洞窟だと思う。ほら、ここに太陽のマークが」

その洞窟の上には微かだが、太陽のマークが刻まれていた。しっかりと刻まれていないところが年月の経過を思わせる。

「でっけ」

「広そうね……」

洞窟の中に入るとバサバサと何か黒いものが飛んできた。とっさにみんなしゃがんだ。

「キヤア、何？」

「見てよ、ただのコウモリだよ」

僕は懐中電灯を上当てた。

「しかし、あれはマジビビるな」

「無結晶の時の洞窟と違ってまだ先は長そうだ。注意して進もう」

「ああ」

「そうね」

## 村上 薫（前書き）

伝説の石を手に入れるも、妹の様子はよくならない。

伝説の石に詳しい怜君に会い、伝説の石は神聖石、秘霊石、劣聖石、無結晶があり、そのうち願いが叶うのは神聖石だけで、残りは能力に関するものだという。神聖石を手に入れるには、能力者であることが必要と聞かされ、怜君を誘うも、断られる。しかたなく、能力者になるという覚悟を決め、偶然手に入った、すべての伝説の石のありかが書かれている地図をみて、そのうちのひとつの洞窟に入るのだった。

### 主な登場人物

翔……小六で主人公である僕　光秀……僕の親友　美智子……学校の級長を務めている　怜君……能力者であり、同級生

## 村上 薫

進んで少しすると、いきなり明るくなった。

そう、まるで暗い部屋に電気のスイッチを入れた時のように。光の元は分からない。

でもかなり遠くまで見える。どうなってるんだろう。

やがて、石の扉の前に着いた。その扉にはとつてがなく、代わりに人一人が手をかける窪みがある。文字が彫られており、よく見ると、『警告！能力者でないものこの先入るべからず』

と、あった。

「どうする？」

「ん、私は引き返した方がいいと思うな。対策を練るとか、他の洞窟に行く、とか」

「俺はそうは思わないぜ」

……と言つて、光秀は石の扉の窪みに手をかけた。

光秀一人の力じゃあ開かないだろう、と思ったが扉はいとも簡単に開いた。簡単に開き過ぎて力いっぱい開こうとしていた光秀がこけたぐらいだ。

「いてててて、何なんだよ」

その後、すぐにゴゴゴゴゴ、という大きな音と地震かと思うほどの大きな揺れを感じた。そして突如聞こえた僕ら以外の人の声。

「前に走れっ！」

振り向くと、無精髭をはやし、革ジャンを着た大人の男性がいた。

僕らはあまりの出来事に理解しようといっぱいっばいですぐに動くことができなかった。

「いいから走れ！」

今度は怒鳴られた。

はっ、と我に気づき、つい、はい、と言つて、敬礼までしそうになったが、そこはせず、僕らは全速力で洞窟の深部に向かって走っ

て行つた。

走っている最中に、そのお兄さんは（おじさんと言つたら失礼かな、二十歳半ばに見える）岩が上部から転がって来ていることを教えてくれた。

え〜と、ここは下りだから、岩が丸いとすれば、瞬時にここまで来る。とか悠長に考え事をしてる間に後ろを向くと、すでに高速で転がってくる岩が見えていた。

駄目かと思われた瞬間、

「仕方ない……」

何かがボソツと聞こえ、（級長なんか悲鳴をあげていたが）目を開いたら、揺れも音もあの岩さえも消えていた。

「何がおきたんだ？」

光秀も潰されると思つてか、手を構えていた。

「私の、能力だ。」

お兄さんが応えた。

「能力で……消した？」

僕は信じられなかった。まるで夢の中にいるのではないかという感覚さえあつた。能力のために命をかける（岩のこと）ということ、そして、能力で岩を消せること。

もしかしたら人の命も消せるのではないか？怖い。洞窟も、この人も。

ここまで危険だなんて聞いていない！

僕は、僕は、妹の為に命をかける覚悟はある。でも、光秀や級長の命もかけることは出来ない。もし二人が、途中で……。なんてことを考えると、怖くてたまらなかった。

お礼を……、忘れていた。

「あつ、ありがとうございます」

「礼はいい。だが、無謀過ぎるな。洞窟に入る時から見てたが、能力者はいないと見える」

お兄さんは見据えたような目で僕らを見た。

「ああ、そうだけど、つけてたなんて、趣味悪いんじゃないの、つか、おっさん誰？」

「ちよつと失礼じゃない？光秀」

お兄さんは襟を整えると、

「ああ、失礼した。私は村上 薫。ある方の命でここにきた。そちらは？」

僕は話した。神聖石の力が欲しくて、能力者になろうと思ってること。

そして歩きながらいろいろ聞いた。

まず、薫さんは味方なのか、ということ。

薫さんは、今は。だが、今後はわからん。

と言ってくれた。その言葉は僕に安心感を与えた。

なんだって、能力者が一緒にいるのだから、まず、僕らの身の安全は保証されているようなものだろう。その後会うことなんてないだろうし。

## 村上 薫（後書き）

小説について勉強しよう。せつにそう思う今日この頃です。

2010・11/3 前書き更新しました。……後書きよりも、  
なりしんどいです。



## あまたの石

洞窟の明かりや石の扉、岩のことも聞いたが、そういう場所なんだ、一言で済ませられてしまった。

他には太陽のマークは能力の手に入る方なのか、ということ。

薫さんはそうだ、と言った。光秀の勘もバカに出来ないわけだ。

そしてリミットルームについて。話を聞くと、能力にはそれが効く範囲や形があつてそれが見えるようになる技らしい。能力者じゃないと使えないそう。

他にも能力は進化するものもある、とか、秘霊石を手に入れば能力の解放（怜君の言っていたパワーアップだろう）も出来る、と教えてくれた。

いい人なのかも知れない。劣聖石は早いもん勝ち、ということになった。まあ、仕方ないことなんだろう。絶対負けるもんか。

やがて、またしても石の扉の前にたどり着いた。

その扉には、

『能力者であるもの進むべからず』

と、書いてあった。

僕は疑問に思った。

「あれ、これって……」

続きを光秀が言ってくれた。

「似てる……よな」

「これは！」

薫さんは何か知っていそうだった。聞いてみると、

「これは、能力者が入ると、トラップが作動しますよという意味だ」

「ってことは、さっきは私達が進んだから岩が……」

「そういうことだ。私がここから先に進めばトラップが作動する。」

恐らく先程のものより強力なものが発動するだろう。私一人だけな

らこの洞窟程度のトラップ、くぐり抜けることは容易いが……」

「ちよつと待て。早い者勝ちとは言ったが、俺達だって、頑張つてここまで来たんだ。いくらなんでもそれは卑怯じゃないか？」

光秀がぐいぐいと言い寄った。

「では、お前達にチャンスをやろう」

半ば諦めていたので、その言葉は意外だった。下を向いていた僕は瞬時に薫さんを見た。

「えっ？」

「確かに、平等ではないな。だから、チャンスを与える。お前達がまず、先に行き石を手に入ればお前達の勝ち。無理だと思ったら、戻ってこい。その時はお前達の負けで、もちろん石は私が手に入る。まあ、どちらにしろこの洞窟は危険だ。帰りは私が送ろう」

「わかった、俺達の勇気をみせてやらあ。いくぞ、翔、美智子」

なんで、お前がはりきっているんだよ、光秀。

……でもまあ、僕にも異存はない。

「うん！」

「もちろんよ」

しかし、光秀も級長も恐怖という感覚が麻痺しているのだろうか？

……そして、僕ら三人は先に進んだ。

すると、一つの部屋に着いた。広さかというと、小学校の体育館ぐらいたろうか？そこにこれでもかって程、石が並べられてあった。

形も大きさも様々な石が。

「これは、普通に探しても無理じゃない？」

級長はすでに疲れている感じがする。

「ほら、片っ端から探すぞ、翔」

というと、光秀は本当に片っ端から吟味し始めた。

「まず絞らないといくらなんでもこの数は何日かかっても無理だよ」

「そうよね。形とか、大きさとか」

「怜君にあった時の話なんだけど、怜君、伝説の石を持ってる、っ

て言ったら、不思議そうな顔をしてた。だから、たぶん大きさは人が持てる大きさではない、つまり岩なんじゃないかな」

級長は手のひらをグーで叩いて、

「なーる。でも並べられている。石の中にはそれほどでかいのはないわよ？」

遠くから光秀の、お前らも手伝えよー、という声が聞こえる。

周りを見渡すと、僕達が入った入口の両脇にウニのような形の岩があった。

「あれね」

級長も見つけたようだ。

光秀も呼んで話をした。

「でもよお、二つあるってことはどっちかトラップなことだよな？」  
僕と級長は顔を見合わせた。その可能性は考えてなかった。

能力者 成樹、暴走、困惑、そして

「慎重にいかないといけないわね」

……そして、三十分悩んだが、わからなかった。光秀がわからないのならいいだろ、と言い出して、右の岩に触れようとしたその時、級長が、あつ、と声を出した。

その声にびくつ、と反応して光秀の手は止まっていた。

「なんだよ、美智子」

「懐中電灯」

「は？」

僕も一瞬解らなかった。

「ほら、あの砂は懐中電灯にあてるとキラキラ光ったじゃない。でも外にでて太陽にあてても光らなかった。つまり……」

「人工的な光に反応するってことかな」

「おっし、とにかくやってみようぜ」

そして、僕が懐中電灯をあててみる。まず、右。

「……光らないね」

「次よ、次！」

そして、左に懐中電灯をあてると、なんと、淡い緑色に光った。つまり、左が正解だったわけだ。

「良かった」。俺、触らなくて」

光秀は、は、と溜め息をついている。

「と、こ、ろ、で！」

「何？級長」

「誰が能力者になるの？」

「そこだよな」

悩んだ末、じゃんけんで決めることにし、結果、級長が勝った。級長が岩に触れると、今度は級長の体が、淡い緑色に発光した。大丈夫なのだろうか？聞くと、

「大丈夫よ」

と言っていたから無害なのだろう。

そして、光が消えた。

「わかった、これは、変える力ね。触れた物を変化させる力」

「へー。あとで見せてよ、美智子」

僕は片手を上げて、

「はいっ、僕も見たいです。級長」

いつにもなく興奮していた。

「もちろん、早速、私も力を使いたいけど、お兄さんを待たせてるし、ここを出てからにしましょ」

と、いうことで、薫さんがいる場所まで戻った。

薫さんは律儀に同じ場所で待っていてくれた。

「それで、どっちなんだ？」

薫さんは僕達を順々に見、最後に級長を見た時、目を見開いた。

「驚いた。まさか、お前達だけで石の力を手にしてしまうとは。余程の強運の持ち主と見える」

「強運なんじゃなくて実力だっつーの」

チョップ、チョップ、と、光秀は薫さんにチョップをくらわせている。世界広しといえど、薫さん程の能力者にチョップをくらわせられるのはこのバカくらいのもものだろう。

「ははっ、そうかもしれないな」

薫さんが笑った。……かっこいい。どうして、怜君といい薫さんといい能力者というのはかっこいいんだろう。能力者に対する見方がひとつ変わった。

僕もなつてみたい。あんな風にかっこよくなりたい。

「どうして私が能力者だつてわかったんですか？」

「先程も言ったが、リミットルームだ」

「ああ、能力の範囲がわかるってやつか。能力者がそうでないかも分かるってわけ？」

「そうだ。訓練すれば、いづれ見えるようになるろ。まあ、訓練し

た能力者は能力を使いたくない時は能力を使わないこともできる。

その時は範囲も見えないがな」

「へえ」

そして、歩いているうちに、外に着いた。薫さんは、喋っているうち、気がつけば、いなくなっていた。僕達は船に乗り、三浦さんに能力を手に入れたことを話した。

「ところで、ワシに、その能力を見せてくんねえかな」

「三浦さんの頼みじゃあ、断るわけにはいかないよね、級長」

「そうそう、外にでたら見せてくれるって言ったじゃん」

級長は、そうだったわね。というと、自分のリュックサックを下ろそうとしたその時、リュックサックが消え、級長が手にしていたのは十センチ四方の箱だった。

「お」

皆、感嘆していたが、当の本人は錯乱していた。

「え？え？なんで？」

「どうしたんだよ、美智子。成功したじゃんか」

「私、箱にしようとはしてたんだけど、リュックサックの中のものを取り出して変化させようと思っていたんだ。でもリュックサックに触れた途端に……」

## プチ仙人「伝説のおじいさん（前書き）」

伝説の石を手に入れるも、妹の様子は良くならない。

伝説の石が四種類あると判明。僕たちが手に入れたのは願いの叶う石ではなかったという。そして願いの叶う石、神聖石を手に入れるためには能力者になることが必須らしい。僕たちは偶然手に入った、伝説の石の地図を見て、洞窟に入る。軽率な行動をとった光秀は罠を作動させてしまい、死ぬかというときに現れたのは能力者、村上薫さんだった。薫さんは罠を破壊し、僕たちを助けると、伝説の石は早いもの勝ち、と言ったが、先に行かせてくれ、僕たち（級長だけ）は見事、伝説の石の力を手に入れた。帰りの船で能力を披露するが、それは暴走した能力だった。

### 主な登場人物

翔……小六で主人公である僕　光秀……僕の親友　美智子……学校の級長を務めている　怜君……能力者であり、同級生　三浦さん……船の操縦士

## プチ仙人「伝説のおじいさん

皆、だれもしやべれなかった。それはつまり、級長が能力をコントロール出来てないことだと、みんなわかっていているからだ。それがどれ程恐ろしい事か。

三浦さんが沈黙を破った。

「リュックサックをイメージしてその箱に触れば元に戻せるんじゃないか？」

級長はこくこくと頷くと、目を閉じて箱に触れた。すると、もとのリュックサックに戻った。

「私、触れたものの全てを変化させてしまうの？」

級長は今にも泣き出しそうだ。

「大丈夫だって、美智子。つーか、むしろ、便利じゃん？」

光秀はフオローしたつもりなのだろうが、なっていない。

僕は級長にかける言葉を持っていなかった。それどころか、一瞬、僕じゃなくて良かったとまで思ってしまった。僕って、最低な奴だと自己嫌悪した。

頼みの綱は……怜君しかない。

ということで、怜君の家に向かい、怜君に事情を話した。

「成る程な。しかし暴走する能力は珍しい、むしろ、レアなんだろう。それほど強力だってことだ。羨ましい限りだ」

「なんだと、こっちは困ってるんだよ、怜！」

怜君は、はあ、と溜め息をつき、どうどうと光秀をなだめた。

「落ち着け、トンガリ。俺の師匠に会いに行け。まだ3時、夕方までには着くはずさ」

光秀は俺は動物かぁー。と怒っていたが、それは無視して、僕は聞いた。

「本当に、なおせるんだね？」

「勘違いするな、コントロール出来るようにするだけだ。少しの間、



師匠のもとで修行するといい」

級長はわかった、と頷いた。そして、怜君に地図を書いてもらい、出発した。

「山に住んでいるらしい。小さな山だけど。怜君が言うにはプチ仙人だっけ言ってた」

「仙人に、プチもプチじゃないもあんのかよ……」

僕と光秀は話しながら向かって行ったが、途中、級長が話すことはなかった。それほど、ブルーだったってことだろう。山はさほど険しくなく、なだらかなものだった。

それがせめてもの救いだ。やがて、一軒の家屋を見つけた。見渡したがチャイムもなく、窓も塗装もボロボロで、家というよりも、小屋という感じがした。

本当にこんなところに人が住んでいるのだろうか？

まず、僕はノックをした。

「なんだろうか？」

声からすると、60代のおじいさんっぽい。僕は能力が暴走した旨を伝えた。

すると中から、入りなさい、と聞こえたので、僕達は中に入った。中は外と全く違って見えた。ボロいのは仕方ないとして、きれいだった。

並べられた、いすやテーブル、それにほこり一つないように見えた。おじいさんは目の前のテーブルイスに座っている。

しかし、ただのおじいさんというにはあまりにも聡明なオーラと気品に包まれている。

おじいさんは僕達を順々に見ると、

「お嬢さんか」

薫さんと同じく、見抜いた。

「分かった、こっちに来なさい」

級長が前に出た。目が潤んでいる。今まで泣いていたようだ。……それもそうか。

おじいさんは両目を閉じて左手を級長の額に当てると、すぐに目を開いた。

「分かった」

手を当てただけで分かるということはおじいさんも能力者なんだろう。

おじいさんは説明してくれた。級長の能力は物を手で触れることによつて発動する。

そして、考えたもの何にでも変えることができる。ただし、イメージでできる範囲で。

そして変えることができるのは一日に三回まで。

操るにはよほどの精神力が必要。とのことだった。

「結局、どうすればいいんだ、じいさん。そこがわかってねーじゃん」

光秀もいい加減焦れなくなったのだろう。僕も言おうと思っていなくらいだ。

「お嬢さんは、えーと……」

僕達は自己紹介した。おじいさんは源史朗さんというらしい。

「美智子ちゃんは、能力をどうしたいのかな？」

「え……と、いいいますと？」

プチ仙人〃伝説のおじいさん（後書き）

2010.11.1/3

前書き更新しました。

## ダブルフォース―決断

「だから、ほれ、能力を無くしたいのか、使いこなしたいのか、どっちかな？」

級長は下を向き、悩んでいるようだ。

「美智子、悩む必要なんてないだろ」

「そうだよ、級長、無くしたい、と言いなよ」

級長の答えは僕らの予想に反したものだっただけ。

級長は前を向き、決意に満ちた目でこう言った。

「私、使いこなしたいです」

僕と光秀は級長を見たが、その瞳は変わらなかった。ゲンさん（源史朗さん）は自分の足のふとももをポンツと叩くと、

「わかった。では君の能力を使いやすいように縛ろう」

「縛る？」

僕は疑問に思った。先程、能力で、級長の能力のことがわかったのではなかったのか。じゃあ……縛るって？考えてもわからない。

「さて、普段は能力を封じた状態にしよう。だが、一時的に能力を使う時、何の仕草を能力発動の又、能力を封じる、鍵にしたい、かな？普段生活してて、しないことがいいと思うのじゃが」

級長は顎に手を当てて、悩んだかと思えば、すぐに答えた。

「発動は空中に五角形を描く、封印は空中に三角形を描く。で、お願いします」

「その通りにしよう」

ゲンさんは今度は右手を級長の額に当てた。

「よし、終わりじゃ。ためしに翔君に触ってごらん」

級長は僕に触れようとしているが、その手はプルプル震えている。

僕は目をつむった。ゲンさんを信じていないわけじゃないけど。記憶によれば、リュックを箱に変化させて、それを元に戻した。

つまり、能力を使ったのは二回。あと一回残っている。級長が僕を

触れる時考えることって？そんなことを考えていると、悲鳴が聞こえた。

「ぎゃー、神様、どうか、死ぬ時は女の子に囲まれて死にたかった」目を開くと、光秀が大袈裟に演技していた。級長、どうやら光秀に触れたらしい。だが、光秀は光秀のままだった。

「良かった」

級長は胸を撫で下ろしている。

「ふっふっふ」

ゲンさんは笑っぱなしだった。

「怜君にお礼言わないと」

「美智子、その前にお礼言すべき人が他にいるだろ？」

「あ」

その後、僕達はゲンさんにお礼を言った。

級長はリミットルーム（能力の範囲が見えるようになる技）を使えるようになりたいと、いいだし、ゲンさんはそれを了承した。

僕が、次に能力を手に入れるのに、能力者がいないのは痛いと言ったら、ゲンさんが、能力者の孫を貸してやろう、というのでそれで妥協した。

「ところで先程言っていた、怜君とは？もしか、坊のことかな？」

話しているうち、怜君は小さい時、ゲンさんの弟子で、坊、と呼ばれていたことが判明した。光秀が、今度からかってやる、と言っていた。やめとけて。

「プチ仙人、プチ仙人ってな、山が小さいからじゃろうか、かわいかったもんじゃ」

……怜君は、身長が小さいからだと言っていたが、さすがにそんなことは言えない。つか、身長二メートルぐらいの仙人がいたら、それはそれで怖いと思うが。

何故能力を二つ持つてゐるのかを聞くと、

「左手は分かる力、右手は縛る力。普通は能力を二つ手に入れるな

どできん。能力と能力は反発するからな。わしは……。まあ、いづれ、坊にでも聞くといい。だが、この力を得る為には、あまりにリスクが高すぎた」

そう言ったゲンさんの目はどこか、遠いところを見ていた。

それから、僕達は級長と別れ、帰ることにした。

帰り道。

「光秀、僕、今、思い出したんだけど、怜君、無結晶は能力を消す力だと言ってた。あれ使えば、級長の能力、消せてあげられたんじゃないかな？」

「ああ、そう言えばそうだったけな。でもあいつがああ決めたんだから、もう、いいじゃねえか」

辺りは真っ暗だ。

「それと何で級長はあんなに嫌がっていた能力を逆にコントロールしようと思ったんだろう？」

「ああ、もう、細かいこと言いつこなし。俺達は男子。乙女の心が分かるはずないだろう？」

暗い道、街の光目指して、人工的に作られた山道を歩む二人。星を見る。

なあ、上（星）と下（街）の光、どっちが好き？

僕？うーん、どっちも。

ふーん。

くだらないことをだべりながら帰る二人、真夏の夜の日だった。

## ダブルフォース〜決断（後書き）

頑張ります。まだまだ続きます。

## 戒さんと恐竜と包帯と眼帯

翌日、僕と光秀はゲンさんのお孫さんと公園で待ち合わせをしていた。

「ところで翔、次の場所はどこなんだ？」

ベンチに座りながら、網ごしのサッカーボールを蹴る光秀。朝、出発するときにも言ったのだが、懐中電灯はともかく、サッカーボールまで持つてくこともなかるうに。光秀いわく、意外に役に立つ時がある、だそうだ。

僕は地図を拡げた。光秀が地図を覗きこむ。

「うへえ、いっぱいあり過ぎてどこからいったらいいかわかんねえな」

「そうだね、この前は近い無人島に行ったけど、この辺りにも太陽のマークがあるんだよね」

「ふむ、これは能力者でないと行けないところかな？」

僕と光秀は驚き、後ろを見た。ベンチの外側に僕と光秀の知らない第三者が地図を覗きこむようにして立っていた。

「ああ、これは失敬。僕は戒だべろっ！」

話の途中で光秀の網のとれたサッカーボールのシュートがその人の顔に炸裂していた。

僕はポカン、と口を開けてみていた。

「……どうやら、高校生ぐらいに見えるこの人は、気絶してしまったらしい。」

「光秀、なんで？」

「いや、手っ取り早く見分けようと思って。能力者ならよけられるだろ、と思ったんだが、……。一般人だったのかな？」

「いや、戒って言ってたし。ゲンさんのお孫さんで間違いないと思うよ」

「マジで？」



取り合えず、呼びおこすことにした。そして二人で土下座して謝った。

「まったくもう、びっくりだよ。いきなり顔にシュートをきめられるとはね」

戒さんは起きて、記憶をとり戻してから、そう言った。

「で、能力者しかいけない道というのは？」

僕は話を反らしてそう聞いた。

「ああ、正確には能力者にしか見えない扉があって、能力者がそれに触れると行ける場所、だね」

光秀が手を上げて、

「先生、質問」

「何かな、乱暴な光秀君」

どうやら、僕達のことはゲンさんに聞いてたらしい。

「それじゃあ、俺達はそのにはいけないんですか？」

「いや、能力者が随伴すれば、行けるよ。だけど、この地図じゃ、おおざっぱ過ぎて場所の特定は難しいなあ。そうだ、ちょっと、聞き込みしてきてよ」

話によると、その扉があるところでは必ず変なことが起こるらしい。「それには及びません、地元ですから。ここいらで、変なことと言ったら、やっぱり、あそこだよな」

「小学校のプール！」

僕と光秀は同時に言った。僕達は小学校に向かいながら話していた。戒さんが、ちなみにそこでは何が起こるんだい？

と聞いてきたので、光秀が説明した。

これは清掃員が言っていた話なんすけどね、夜な夜な、プールの水位が一センチごとに上がっているそうです。

ふん、可能性はあるね。そして、プール。

「あつた、僕についてきて」

戒さんはそう言うと、プールの飛び込み台から水面へと飛び込んだ。すると、水音もせずにあとかたもなく消えてしまった。僕と光秀も

それに続いた。いきなり目の前が真っ白になり光景がぐらぐらと捻れながら、一つの光景が構築された。

そこは、広大な世界。

かのように見えた。結構広い。見渡す限り草原だ。遠くに海のようなものも見える。

「ギャワーウー。」

この世界が揺れるのではないかという程の大声。

前には光秀と戒さんがいたが、僕ではなく、その後ろにあるものを捉えていた。僕は即座に後ろを見た。

「きよ、きよ、きよ、恐竜〜!？」

おどろくべきはそこではなかった。

途端にそのティラノサウルスのような恐竜が破裂した。恐竜の血と肉片が飛び散る中、恐竜の後ろに見えたのは、背丈が、僕と変わらないぐらいの包帯巻きの男。

包帯を服代わりにしてんのか? と思えるぐらい巻いていて、流石に顔にはしていなかったが、代わりに左目に眼帯がしてあった。

戒さんと恐竜と包帯と眼帯（後書き）

まだだ！まだ続きます。

## 殺し屋デス

その同年代にしか見えない包帯眼帯男が聞いてきた。

「何者だ」

僕と光秀は突然の出来事にまたしても混乱していた。

えくと、プールにダイブしたら、別の世界に来て後ろに恐竜が、と思ったら、その恐竜が破裂して、その後ろには包帯眼帯男が……。つて、なんじゃそりゃー。

「光秀君、翔君、しっかりしろ、奴は……殺し屋だ」  
殺し屋は言った。

「無駄な殺生はしない。私は殺し屋デス」

光秀がこそそと、僕に耳打ちした。

「ずいぶん丁寧な殺し屋だな」

戒さんは真面目な顔してつつこんだ。

「違う。名前がデスだ。それよりも奴の指先には気をつけろ、右手の人差し指のほんの先っちょだ。それが奴の効果範囲だ」

僕は頭の中で整理した。

「つまり、殺し屋の右手の人差し指に触れると、破裂する、ということですか？」

「そうだ」

デスが名前だと聞いて笑っていた光秀の顔が凍りついた。僕はもう何がなんだかわからなくて恐怖感なんてとつくに麻痺してた。

殺し屋は話を続ける。

「交渉しないか？お前らがあの劣聖石を諦める代わりに、お前らの命を助ける。どうだ、お得だろう？」

殺し屋の後ろには、あの、ウニのような岩、劣聖石があった。僕は諦める気満々で、もちろん戒さんもそうだろう、と思っていたのだが、そうではなかった。

戒さんは右手を銃のように構えると撃つ仕草をした。

「馬鹿を言つな、こいつら二人には手に負えないレベルだが、俺は能力者だ。しかも遠距離のな。勝ち目がないのはお前の方だぞ、殺し屋デスよ。お前が殺し屋たる所以を俺は知っている」

殺し屋はチツ、と舌打ちすると、

「今、私を殺しておかなかったこと、後悔することになるぞ」

と言いつつと消えた。

「はあ、ドキドキした」

光秀は手を胸にあてて、溜め息をついている。

「僕はそれ以上にわからないことだらけで、思考停止状態だったよ」  
僕も溜め息をついた。

「わからないことがあつたら、今のうち、どうぞ」

戒さんは片手を広げてそう言った。

ひとつひとつ、聞いていこうと思う。

まず、この世界は？

この世界は天使界と呼ばれるところで、元は天使達が住んでいたところなんだ。

さつき言っていた、能力者にだけ見える扉、異界の扉をくぐり抜けた先にそれはある。

そしてそこには必ず劣聖石とそれを守るモンスターがいるんだ。さつきの恐竜はそれだね。

恐竜が破裂したのは？

おいおい、そんなこともわからないのかい？それはデスの能力だよ。能力者なのに何でデスはここに？

能力を狙ってきたんだろ？ね。たぶん殺し屋だから主がいるんじゃないかな。

でも異界の扉はたくさんあるのに、デスがここにくる確率って？確かに確率で言えば、かなり低い。

……けどこれは迷信のようなものだけど、力のある石の意思が人を引き寄せると聞いたことがある。

さつき戒さんが言っていた、デスの殺し屋たる所以というのは？

ああ、それはデスの能力の範囲は右手の人差し指のほんの先つちよだ。能力と能力は反発するのは知ってるね。

能力者同士が戦う場合、それを利用して相手の能力の侵食を防御するんだが、デスの場合、それができない。しかし、能力は破裂させるという強大なもの。

……つまり、対能力者には向いていない。暗殺向けなのさ。デスが消えたのは？

入って来たところから出ただけだよ。一つの天使界につき、三つくらい入り口があるからね。

## 僕の、能力

「ありがとうございます。だいぶ整理ができました」

「今ので全部理解できたの？ 頭いいんだね、翔君。……そっちな乱暴な光秀君はわかったのかな」

「……たぶん」

とか言いながら頭をひねっている。ぜってーわかってないよ、こいつ。

「あ、先生、質問！」

「何かな、乱暴な光秀君」

「恐竜が破裂した時になったこの血でべっとりの服、親にどう言い訳したらいいですか？」

「それは……あ、誰が能力者になるか決めようか。」

……能力者といえど、親を言いくるめる能力はないらしい。僕は親に絵の具を使う授業だった、とても言うかな。

又はケチャップを使う料理を失敗したとでも……下手な言い訳だな。

どっちが能力者になるかは、結局ジャンケンで決め、僕が勝った。

石に触ると、前回のように淡い緑色に僕の体が光った。

「うん、これは……戻す力だ」

「翔、触ったものを戻す、ってことはないよな」

「わかんない。……、試しに触ってみる？」

僕が光秀に触ろうとすると、光秀は

「よ、よ、よ、よせ！」

と言って逃げて言った。うーん、冗談なのに。

「でも僕、たぶん、能力の制御ができる」

「ははは、まさか、翔君、訓練しないと……」

戒さんはそう言っていたが、僕は出来る気がした。

僕は精神を研ぎ澄ませ、ないものを瞬間的に出すイメージを作った。

すると、僕の手には三角形の盾が握られていた。大人が一人入れるぐらいのでかい盾だ。盾は重く、持ち上げることは出来なかった。僕は身長が小さいので、すっぱり入る。盾の色は透明な薄緑色で、前にいる戒さんが盾を通り越して見える。

これが……能力。僕はただただ圧倒された。どういう風に戻るのか試してみたい衝動にも駆られたが、そこは押さえた。

これで、僕も薫さんや怜君のようにかっこよくなれるだろうか？

「翔君、すごい！」

戒さんはそう言ったが、僕は何がすごいのかわからない。

「え、え、何？」

光秀も、どしたの？という顔で僕と戒さんを交互に見ている。

天使界を出て、僕達はゲンさんの元に向かっていた。戒さんが言うには、一度、こういう能力なのかじいちゃんに見てもらった方がいいよ。

とのことだった。その際に、初めから能力をコントロールできるなんて才能だねー、と言われ、さっきのすごいはそのことか、と初めて気がついた。光秀も驚いていた。

そんなにすごい事なんだろうか？

「ただいまー、おじいちゃん」

「おお、今帰ったのか、お帰り、戒よ。そして翔君達も一緒か、ちようどいい、美智子ちゃん、修行の成果を……あれ？」

ゲンさんと級長は椅子に座って話をしていたようだ。

「あら？今回、能力は手に入れられなかったの？」

級長もリミットルームを使ったらしいが、僕が能力者だとわからないらしい。それはつまり、僕が能力を使ってないから。

戒さんは説明した。

「それがさあ、じいちゃん」



「なんと！初めからコントロール出来ると。若いのにたいしたもんじゃ」

初めにここで驚かれ、外で能力の範囲（盾）を出した時、さらに驚かれた。

ってか、能力のコントロールに歳は関係あるのか？

ゲンさんに今までのことを話した。

「ほお、殺し屋デスに会ったか。……あやつ、未だに人を殺しておるのかのお」

何かありそうな感じだったが、聞くことは出来なかった。

## 僕の、能力（後書き）

この小説のキャッチフレーズを考えていたのですが、忘れた頃にやってくる、じゃ、だめですかね。

## 長所と短所

そして、分かる能力で調べてもらった。

「ふむ、翔君の能力は人や物を翔君が以前見たことがある状態に戻すことが出来る能力のようじゃ。でかい盾じゃから動かすことは出来ん。出し入れが重要になるじゃろう。盾は五ミリ四方の線で構成されておるようじゃの。能力の戻す力や、その範囲、盾ということからして防御に向いておるようじゃ」

僕はお礼を言った。

そして、僕達は今日は各々の家に帰ることとなった。

明日は、ゲンさんの提案で、能力を持つている僕と級長はゲンさんの元で修行や講習を受けることになり、光秀は怜君と、光秀が能力者になる為に天使界か、無人島の洞窟（前とは違うところだ。）に行くことになった。

帰る前に、次は戒さんは参加してくれないんですか、と聞いたが、どうやら、大学受験で忙しいらしい。

戒さんは、

「大丈夫、君達なら、大丈夫」

と笑顔で言ってくれた。その言葉は僕に自信を与えた。

光秀が、

「明日はお前と一緒に行動出来ないのか、つゝか、怜とかよ！うゝん、ジェラシー感じるな」

級長にジェラシーって……。まあ、この機会に怜君と仲良くなってくれるといいんだけど。

翌朝、僕は級長と小学校で待ち合わせし、一緒に、ゲンさんの元に向かった。

「よく来たな」

ゲンさんの家をノックして入ると、ゲンさんはベッドで横になっていて上半身だけ身体を起こしていた。ベッド横のカーテンは開いてあったので、今起きた訳じゃなさそうだ。

ゲンさんは、よっこらせ、と身体を反らすと立ち上がりコーヒーを用意してくれた。コーヒーを飲み終わると、ゲンさんの講習が始まった。

「戦いの基本はリミットルーム、いいかな。では、リミットルームとは、何じゃったかな？はい、美智子ちゃん」

級長が手を挙げ、すぐに、はい、能力の範囲を見えるようにする技です。

と答えた。

「その通り。相手の能力や自分の能力の範囲が透明な薄緑色に見える技じゃ。この技は常時使えるようにしておく必要がある。その訓練は後でしょう。大丈夫、能力者なら、負担は物を見るのと同じくらいじゃ。次は長所と短所について」

外に出て翔君の能力を出してごらんといわれ、外に出た。

盾を出すと、

「美智子ちゃん、空中に五角形をかいて翔君の盾に触れてみてくれんじやるか」

確か、空中に五角形を描く、は級長の能力発動の鍵だったはずだ。

級長は言われた通りにした、すると、盾に級長の両手が触れた瞬間、バチっとその両手を弾いた。

「これが、能力の反発じゃ」

僕と級長はほお、と感心していた。

「能力同士は相入ることがない。じゃが、例えば、美智子ちゃん、ハゲをイメージして翔君の頭を触ってごらん」

級長は恐る恐る、僕の頭を触れた。すると、頭がやけにすーすーする。……まさか。

「この通り、ハゲになる。じゃない、能力が効く。能力の範囲以外

の場所を能力で突けば、こうなるんじゃないよ」

寒いと思った。まだ、小六なのに。ひどいや、級長。級長はごめん、  
といいながら戻してくれた。

「見たところ翔君の盾は素早く出し入れできるようじゃ。これなら、  
近接型の能力はほぼ、防げるじゃろう。これは長所」

うん、昨日確かめたけど、出し入れは一秒もかからないぐらいだ。

「じゃがな、相手が遠距離型の能力者の場合、弾を操作されて盾の  
ないところから撃たれたり、又は翔君の盾の合間、五ミリ以下の弾  
だった場合、モロにくらってしまう恐れがある。これが短所じゃ」

成るほど、僕の能力は近距離の防御に特化している、ということか。

「講習、これでおしまいじゃ。何か訊きたいことは？」

## 長所と短所（後書き）

関係ないですが、最近、散歩してます。  
ダイエットです。この散歩を小説に活かすには！  
と毎日考えております。

## 修行

はいつ。僕は手を挙げて、訊いてみた。

敵の能力者が能力を使っ てない時に、能力者だと分かる方法はないんですか？

「いいところくのう。一般人だと思って先に攻撃されたらかなわんからな。……」

それはじゃな、この魔石を持っ ていきなさい」

いつの間にか、おじいさんの手には直径二センチぐらいの小さく丸い石が二つ、

握られていた。

見た目、普通の石だ。

そのそれぞれを僕達にくれた。

「これは魔石と言っ て能力者が昔に作っ たものらしい。これを持っ ていると、第

六感、つまり、勘が鋭くなる。一目で敵だと感じるはずじゃ」

僕と級長はお礼を言っ た。

話によると、級長は能力の出し入れの他に、もうひとつ、ゲンさんに縛っ ても

らっ たらしい。それは遠距離の攻撃が来たとき、オートで能力の封印をと き、敵

の弾を弾く、というもの。両手が能力の範囲の級長ならではの防御法だ。

ゲンさんが言うには二人で最強の防御陣だっ て言っ ていた。級長を見るとなん

か、嬉しそっ に見えた。

でも、級長ばっ かり縛っ てもらっ てずるいな。

「では、これからリミットルームを使えるようにする、実技を受けてもらう」

級長は、

「私は昨日受けたから。それに宿題たまってるのよねえ。じゃ、頑張ってるね、翔」

「ということさらー、と言うと帰って行っちゃった。」

ゲンさんは修行用の天使界がある、といい、山の洞窟に入って行く、と、天使界に連れてこられた。

入るや否や、修行、スタートじゃ、と言って、ゲンさんは消えてしまった。

……え？僕、ここに取り残された訳？

見渡す限り、一本道だ。両脇には高い壁があるが、模様といったものはなく、

白一色で、どのくらい進んだのかもわからない。

発狂してしまうよ、マジで。

考えて見よう。

盾を出しても盾が見えるってことは、リミットルームは常時使えてるってこと

。

じゃあ、なぜ異界の扉は見えないんだろう。

もしや、もう見えてる？

いや、ないな。白い壁が異界の扉のはずが……。

えーい、出てこんかい！心の中でそう想うと、本当に淡い緑色の扉がでてきた

。外にでて、ゲンさんにどういふことか理由を訊いた。

「目的は、リミットルームを使えるようにすることではなく、意思



の力を試すも

のだったということじゃ。」

ますますわからない。

「翔君はもともとリミットルームを使えてたじゃないか。異界の扉の出口は能力

に似たようなもの。能力は心に左右される。とくに天使界ではの。

心が強ければ、能力はそれに応じ、弱まれば、逆に能力も弱くなる。まあ、ということを感じて欲しかったんじゃないが……」

「そういうことだったんですか。僕はたまたま運が良かったんだ。」

「運も実力の内というし、まあ、合格じゃろ」

と言うことで、僕は晴れてゲンさんから卒業、ということになった。僕としては

ラッキーのうちに終わっちゃたのはすごく残念だけど、

「今までありがとうございました」

お礼を言って、帰ることにした。

「また遊びにおいで」

ゲンさんのその一言が嬉しかった。

光秀は能力を手に入れただろうか？                    いや、まず、生きているだろうか？

不安になり、帰り道も早足になっていた。

帰るなり、光秀に電話した。

「光秀！」

「おお、翔か、どした？                    息が荒いぜ」

「能力は手に入ったの？」

「モチ！」

話を聞くと、

冷君は始めからイラついていたらしい。そして、ケンカから始まって、天使界と

洞窟、どちらに行くか訊かれたから、簡単そうな天使界、と答えた。

ところが、1

人で怪しいところの聞き込みをやらされ、天使界のモンスターも自分でなんとかしろときた。

しずかぁ。

モンスターは怜君によると、オークという種類らしい。猪顔で、棍棒を持ってい

る、あれだ。……が、三匹いたそうだ。

「三匹もだぞ、信じられるか？ パワーは怪物だしよぉ」

「うーん、すごいね」

でも怜君は木刀ですでにオーク二匹を倒していたらしい。能力も使ったのかな？

「あとはオーク一匹な訳だが、俺のシュートが効かないのなんのって」

こいつ、モンスターにサッカーボールで挑んでいたのか……。ある意味凄い奴か

もしれない。

「そこで閃いたわけよ、能力だけとってとんずらしちまえ、と。俺って天才？」

「いいから続けて」

そして本当に能力だけとってとんずらしてきたらしい。能力について訊くと、

「ああ、飛ぶ能力だ。詳しくは明日、じいさん（ゲンさん）に訊きにいいこうかと思ってる」

……飛ぶ能力。光秀、飛ぶのか。いいなあー。羨ましい。

そして、少し雑談してから電話をきった。

辺りは暗く、僕は部屋の電気を消し、明日に備えることにした。

そして、明くる朝。光秀と級長と僕とで、ゲンさんのもとに向かった。

「ふむ、光秀君の能力の範囲はサッカーボールのようじゃな。それ

と、両足。じ

やから、能力の反発を利用して蹴ってとばすことができる。当たった相手や物を自由に飛ばすことができるようじゃ。一度に出せる球は四つ。じゃな」

光秀は礼を言った。

「サンキュー、じいさん」

そして、ゲンさんは光秀を修行の為、預かると言った。

そして、ゲンさんはふと、訊いてきた。

「今更じゃが、何故に翔君達は能力を使いこなしたりしたいのかな？」

「それは……」

僕は説明した。病気の妹を救う為、神聖石が欲しいことを。その為には能力者になることが必要だと言われたこと等。

「成るほど、しかし、それは早く言いなさい。翔君はもう、妹を助けることができる」

「え？」

「どうということだろう？」

「何故なら、翔君の能力は以前見たものに戻す力だから。」

「あ」

そうか、もう危険な目に会う必要はないんだ。  
妹を治せるんだ。

これで、終わるんだ。

いつの間にか僕の目には涙が流れていた。

「すぐに妹さんの元に行つてあげなさい」

「ありがとう、ゲンさん。級長、光秀、行こう！」

「ええ、行きましょう」

「なんだ、もう旅は終わりかよ。でも、ま、静ちゃんが治るのなら行くっきゃないな」

ゲンさんにお礼を言い、僕達は早速、妹の元に向かった。

「静っ！」

僕は急ぐあまり、勢いよく、病室の扉を開けてしまった。中にはベッドに寝て

いる静とその横で椅子に腰かけているおじいちゃんがいた。

静は今は眠っているようだ。

「どうした？翔。いきなり来てびっくりしたぞ」

「おじいちゃん、静を治すことが出来るんだ！」

「どういうことなんじゃ？」

僕は事情を説明した。

「ほう、ならば早速。」

「うん」

僕は能力を使った。

戻ってこい、元気な静。

すると、静がゆっくり目をさました。

「……、お兄ちゃん？」

「静、どうか悪いところはないか？」

「そう言えば、苦しくない」

僕は自分のおでこを静のおでこにくっつけた。

「うん、熱もないな」

この後、医者が来て治ったことに驚いていた。天変地異の前触れかー、とか言

っていたけど、失礼だな、僕の努力の結果なのに。

静は一週間安静にして、何もなかったら、退院、ということになった。その後

、しばらく静と話をしていたけど、気がつけば、級長と光秀はいなかった。僕に

気を使ってくれたのかもしれない。

そして、家へと帰った。帰り道、じいちゃんが、  
「ところで翔や、言い訳にしていた夏休みの長期合宿についてじゃがの、本当に

学校から長期合宿の紙が来ての」

「え！ってことは」

「どうやら、ばれてしまったようじゃの」

「えゝ、親にどう言い訳すればいいのさ」

じいちゃんは無言だった。目は笑っていたが。

じいちゃん、こんな時に言っただけ欲しかった。

まだ、希望はある、と。

しずかぁ。  
(後書き)

すみません、とばしましたね。

## 滅んでしまった世界

そして、僕とじいちゃんの家に戻った。両親にこっぴどくしかられたのは言うま

でもない。しかられた後の言葉が、これだ。

「勉強はともかく、宿題は済んだの？」

あ……。その後、親と宿題をする羽目に。

気づけば両腕を組んで机に寝ていたらしい。

はっ、宿題！と思って見てみると、案の定、終わってない。お父さんとお母さんは……。

お父さんは隣で寝ていた。僕はホッとして反対側の隣を見た。

そこにはお母さんがいた。立ったままだ。

「あ、お母さ……」

目を疑った。お母さんは目を開いて立ったまま、動いていない。父親を再び見る

。見たところ、父親は普通に見えるが、腹が動いてない。呼吸してない！？

お母さんもだ。え、え、どーゆう事？ どーしたらいいんだ

ろう？ そうだ、

僕は以前見た物をもとに戻す能力者だった。盾を出す。そして、つい最近の明る

い家族をイメージ、そしてそれを現実……、うわっ！

僕はまるで圧縮した空気が一気に開放されるような勢いで盾に弾き飛ばされた

。そのままタンスにぶつかり、気を失ってしまった。

「翔、起きろ、翔」



ん？ウニがしゃべってる。

「僕、ウニは嫌いだから」

そして再び目を閉じる。

ウニと何かが話している。

「はぁ、どーする？」

「緊急事態なのよ、無理矢理にでも起こすわよ。翔、起きなさい！」  
頬に衝撃が走った。と、同時に目が覚めた。

目の前には級長と光秀が。級長の手を見るとどうやらビンタされたらしい。

「翔、状況、わかってる？」

級長が心配そうに顔を覗きこむ。光秀は後ろで女ってこえ、と言っているのが

聞こえた。

「え……と、そうだ、お父さんとお母さんが」

まわりを見ると両親は人形のように先程と変わらない姿でそこにいた。

「夢じゃなかった」

僕は泣きそうになった、が。

「翔、泣いてる暇はないぜ。お前の両親だけじゃない、俺や美智子の親もだ。そ

れだけじゃない、電気もつかない水道の蛇口から水もでない、俺達も混乱してた

んだ。」

「俺が学校に行ったら美智子がいて、翔の家にも行ってみよってことで来てみ

たらお前が倒れてたんだ」

「そうだったんだ。僕は確か、能力を使ってこのおかしい現象を元に戻そうとしたら盾に飛ばされたんだ」

「何でだ？何で飛ばされたんだろう」

光秀は頭をひねっている。いきなり級長が両手を叩いて、

「わかった。今、リミットルームで確かめたから間違いない」

え？何が？と、光秀。

僕もリミットルームを使って見た。これは！　なんと、辺り一面薄緑色に輝いてい

た。お母さんやお父さん、机や椅子、宿題までも全てだ。僕はおずおずと、

「つまり、これは、能力者の仕業？」

「そう。そして翔が盾に飛ばされたのは、能力の反発と考えれば説明がつくでしょ？」

級長の把握能力にはいつも驚かされる。

光秀はあることに気づいたようで、

「ちよつと待て。水もでないんだぞ。生きていけないし、トイレだつて臭くなる

ぞ。それまでにその能力者を倒すなんて俺たちだけで、ましてや死ぬ前に倒すな

んて不可能だ」

僕にはある人を頼るしか出来ない。

「源さんに、会いにいこう。何か知っているかも知れない」

外に出ると、いつもと違い、街の中はシンと静まりかえっている。人はいるが

、僕ら以外の人は止まっている。八百屋のおじさんと話している僕の隣のおばち

やん、や公園で遊んでいる子供達、など。リミットルームを使うと全てが淡く輝

いていて、昔やったゲームの滅んでしまった世界を彷彿させられる。

「これは……」

僕はめまいがした。こんなの僕の住んでる世界じゃない、と言いた

かった。だが

、この世界はもう現実なのだ。

「もしかして、おっぱい揉み放題じゃね」

光秀がまたアホなことを言い出した。

後ろにいる級長がいつの間にか空中に五角形を描いている。ゾクッ  
と僕は悪寒がした。

## 今後の話

「光秀えゝ？ そんなことしてごらんなさい。あんたを嫌いなピ  
ーマンに変えて  
あげるわよ」

暗い調子で言うのでさらに恐い。

「冗談だって、いや、マジ、ピーマンは勘弁して」

級長は空中に三角形を描いた。その後、光秀が僕にひそひそ声で、  
「美智子をからかうのも命懸けだな」

僕は友人に忠告してやった。死にたくなければ、大人しくしている  
ことだね、と

。彼女の性格であんな能力手に入れたらどんな目に会うかわかる…

…はっ！ 僕

は殺気を感じ、後ろを振り向くと、そこには空中に五角形を書いて  
いる級長が…

…。

「さあ、はりきっていこー」

さつきとはうってかわって級長が明るい。

先程のストレスが光秀の髪をなくすというエネルギーに変換された  
のではないかと僕は思う。代わりに光秀が暗い顔をしている。

ちなみに僕は盾でガードした。

そうして源さんの家に着いた。道中、光秀と僕は謝って、なん  
とか髪を元どう

りにしてもらった。僕的能力でも戻せたが、もし戻したとしても、  
級長の心まで

は戻せないの、そこは諦めた。しかし、級長は無駄に能力を二回  
使ってしまった

た訳だ。

扉をノックする。

「入りなさい」

中に入ると、はりつめた空気の中、テーブルにっている、源さん、  
怜君がいた。

入ると源さんが待つとったよ、とお茶をだしてくれた。

「どうやら事態は深刻らしい」

一呼吸ついてから怜君が口を開いた。

「どういう状況なんですか？　これは？」

僕はこわごとと訊く。

「お前等は、どんな結論を出したんだ？」

怜君の質問に、光秀は、

「これは、能力者によってされたものだってことぐらいか」  
続いて級長が質問する。

「こんなこと、本当に、人が出来るんですか？……というより、規模はどれくらい

いなのでしょう？」

源さんがほぼ絶望的な答えを口にした。

「全てじゃ」

「は？ちよいと待てよ、じーさん、地球全てがこうなっているという  
ことか？」

光秀の疑問に怜君が答えた。

「地球だけじゃない、銀河系も含めて全てだ」

血の気が引く、とか青ざめる、ということを初めて実感したような  
気がした。

……全て、だって？

源さんは話を続けた。

「こう考えると楽じゃ、我々は止められた時間の中にいる」

僕達三人は顔を見合わせた。そんなことが……。

「先程の美智子ちゃんの質問へのアンサーじゃが、答えは、わからないじゃ」

「え？ 源史朗さんの分かる、能力でもわからない、と？」

級長は質問する。

「能力の反発、を覚えているかな？これはおそらく、能力者がやったもの。だから

能力の反発が適用される。やっても無駄じゃった」

あ、と、級長。そういえば

僕の時も盾に弾かれたっけ。

「だが、目星はついていて。なぜなら、源爺の孫、戒は時を止める能力者だから

だ。そして、奴は今、ここに来ていない。その時点で決まりだ」

怜君は冷静に言った。

源さんは少し疲れ気味に、

「そうかも知れん。だが、戒の能力は直径一センチの

弾をそれも一発のみ打ち出せ、効果も十五秒その物体を止めるというもので、そ

んな強大な能力ではなかったはずじゃ」

「じゃあ、なぜ、奴は家にもここにもいない！」

源さんと怜くんが口ケンカしそうだったので、僕は止めに入った。

「まあまあ、でも当面の目標が決まりました。戒さんを探す、ですね」

みんなそこは賛同してくれた。光秀の食事やトイレはどうすんだ？

という質問

に対して源さんは食事は天使界からも取れるが、いざとなったら、アレじゃ。自

給自足じゃ。トイレはうちの山の特訓用天使界に昔、循環用トイレをつけてもら

ったことがあってな。あ、もちろん能力者じゃ。それを使うといい。



## 天使界再び

そして、話は終わり、僕と級長と怜君は戒さんをさがしに、光秀は源さんの元で特訓することとなった。

怜君について行くこと15分。ただついて行くだけだが、それもちよつと苦しい。

先程から思っていた疑問を口にする。

「どこに行くのさ、怜君」

「俺らの学校だ。お前ら、学校に別世界があるのは、……知ってるな」

「あ、うん。天使界だね」

「そうだ。アレは実は別の天使界へと情報が繋がって

いる、つまり、天使界には天使界のネットワークがあるんだ。

天使界ネットワークはいたってシンプル。必要な情報を検索すれば、その答えが返ってくる。膨大な

な答えがな。絞る必要はあるが」

級長が割り込んできた。

「つまり、天使界内ならどこでも使えるインターネットってことかな？」

「まあ、そんなところだ」

早速、学校に行くと、サッカーをしている子供達が止まっていたり、教室で宿題を

している子供達が止まっていた。もしかしたら、静も……。僕は病院の方を向き

、立ち止まっていた。

「どうした？ 置いてくぞ」

怜君に声をかけられ、後についていく。



そしてプールに飛び込み、気がつくと、前と同じ空間、天使界にいた。

怜君は立ちながら空を見上げ、両手はパソコンのキーボードがそこにあるかのよ

うに指を動かしていた。僕にも出来るのかな、と手を動かしても全く反応なし。

コツがいるのかも。

「わかったぞ」

怜君がいうには、何かのキーワードがあれば、そこを目印にして天使界から目的

の天使界に行けるらしい。そして、今回のキーワードは戒 時を止める能力者 天

使界にいた形跡 その天使界 だ、そうだ。

怜君は空間に手を当てると、空間が光り、その中へ溶けるように消えていった。

僕達もついていく。

すると、そこは砂漠だった。よく凝らして見ると大きな水溜まりに木が一本とい

うオアシスのような場所も見える。

でも、暑くない。そのことを怜君に聞いてみた。

「能力で作られたものには能力者は基本的に反映されない。時を止めた世界でも

俺達が止まってないのは能力者だからだ。良くも悪くもな。ただし例外はある。

能力者が能力を纏ってる以外のところを能力で触れられれば、それは発動する。

それと逆はあるな。能力で作られたものに、能力は使える」

つまり、ここ（天使界）でも能力は使えるということか。

「さて、と。逃げてなければこの辺りに奴はいるはずだが」

と、その時、足元が急に地面に吸い込まれる。足元は丸くへこんで

いて、中心に

人の四倍はありそうな虫らしき姿が。

ありじごくだ！

必死で上に上がろうとするが、砂だからあがけばあがくほど下に落ちていく。

急に滑りが止まった。気づけばへこんでいる部分が石になっていた。そして、僕

や怜君、級長は手足と身体少しが石に埋まっている状況だ。

「これは、何？」

僕は訊いた。

「ごめん、急だったから」

どうやら、級長が三回目の能力を使っただけらしい。

……しかしもうちょっとなんとかならないもんかね。これじゃあ、身動きできないし。

「敵は劣聖石の守護者のようだな」

怜君は補足した。

と、その直後、石にした円形をさらに上回る円形で砂滑りが始まり、動けない上

にどん底に落ちていく行くという最悪の状況に。

どうすれば、あ、元の場所、元の状態に戻せば、僕は能力を使い、元の場所に三

人を戻した。……が、元来た場所がありじごくによって砂滑りになっただけで

、空中に放り出された三人は再び穴の中へ。石は抜け出せたけれど。「お前は何がしたいんだ」

怜君の悲鳴が聞こえてくる。

## 能力者VS能力者

「違う、そっただけじゃない……だ」

怜君が何か言っているがこっちはこっちで考えていて、聞いている場合じゃない。

級長がすでにありじごくに食われそうで、必死に

「砂！」

と連呼している。

えっと、砂とそっただけじゃない、か。

そうか！

僕は能力使い、再び元の位置の空中に三人を戻し、砂も初め見た平らな状態に戻した。

そして三人で大きなため息をはくと、三人とも急いでダッシュした。100メートルほど走ると、やはり、元の場所は円形にへこんでいた。

「なんとか、助かった、ようだな」

怜君もびつくりしたのだろう。

「私も死ぬかと思った。」

うん、それは僕もだ。

一難去った。と思うのも束の間、本当の悪夢が僕らを襲う。

感じでわかった。敵が近づいて来ると。魔石の効果だろう。

それは、薫さんだった。

その目はまるで野獣を彷彿させるほど、恐ろしい目をしていた。

「また会ったな、子供達よ」

「薫さ……」

僕は気軽に薫さんの元に駆けつけようとしたが、怜君に手で制止された。

「魔石が反応している。奴と何があったか、知らないが、奴は、敵だ」

薫さんが口を開く。

「私はいまだかつてこれほどまでに激昂したことはない」

薫さんはぶつぶつ何か言っていた。

あの時に殺しておけば……と。

「早く世界を戻せ、さもないと、殺して能力を解くことになる」

なぜ……あ！　薫さんは時を止めた能力者を検索した結果、ここに出た。そして

僕らがいた。……完全に濡れ衣だ。

僕のリミットリムはすでに、

薫さんが右手から薄緑色のブレードを出しているのを捉えていた。

「薫さん、話を聞いて」

級長の声も聞こえてないのか、無言でこちらに向かって来る。

「問答無用！」

僕と級長は薫さんに睨まれて動けなかった。動くと思われる気配すらした。僕ら

は時を止める能力者ではないとふんだのか、薫さんは怜君の方へ向かって行った。

薫さんはダッシュすると、いきなり右上から斜めにきりつけた。怜君は持ってた

た両木刀で左の木刀で弾き、右で突きを繰り出したが、後ろに避けられる。怜君

の木刀を見ると、武器を能力で纏ってるように見えた。

次は薫さんの左から右へ横薙ぎの攻撃。怜君は両木刀二枚を右脇に縦に重ねて防

御したが、あまりの威力に五メートル程、吹き飛ばされてしまった。

体制を崩し

た怜君にすかさず薫さんの攻撃、

「奥義、大月」

すると、怜君の服の至るところが破けていた。両腕、両足、腹、数ヶ所等。

本来ならば、僕が盾でサポートしなきゃいけないのに。かなり、悔しい。

「次は本気で当てるぞ」

「やめて！」

級長が叫んだ。薫さんは動揺したのか、一瞬動きが止まった。その隙に怜君の両

木刀による二撃が決まった。一撃目は力一杯打ったただの木刀によるダメージ。

二撃目は能力を纏った一撃。

どちらも左足を狙った為、薫さんは、片膝をついた。

「ぐっ」

「やめて」

級長は動けないながらも叫ぶ。僕は級長以上に無力感を感じた。

怜君は両木刀を薫さんに向けると、

「話を……きけ」

と だけ言った。

そして、事情を説明した。薫さんは、すまなかった、早とちりしていたようだ、と

、又、謝罪と言ったらなんだが、子供達がピンチの時、助けにこよう、と言

い、去って行った。

ここには他にも能力者がくるかもしれない、ということで、僕達は一旦、源さん

の元へ帰った。時計も止まっているので疲れたら帰るを繰り返すし

かない。

ところで、と、怜君に何の能力者なの、と訊いたところ、ダメージを倍にする能

力だそうだ。かなり、強そう。それにしても、かっこいい。

## 能力者VS能力者（後書き）

漫画と小説ってぜんぜん違いますよね。……違いますよね。  
いえ、それだけです。

## 追跡、戒さん

源さんと光秀に起こったことを全て話し、一休みした後、光秀の話を聞いた。

「リミットルームは習得したぜ。楽勝だった」

僕は麦茶を飲みながら一息つく。

「あの、特訓用天使界（無限回廊）だよな。真っ白い、一本道の」

「そうそう。俺様のセンスが光る瞬間だったな」

……こいつの場合、妄想力がすごいから、精神力もあるのかも知れない。恐ろしい奴だ。

源さんが言うには、弟子の中で一番、創造力がすごいらしい。能力の出し入れも

すぐに出来るようになったとか。

まあ、少し悔しいのは否めない。

そして、今度は光秀も含めた四人で再び戒さんの情報を求めて、学校の天使界へ

。

その後、僕は怜君に怜君の能力で疑問に思っていたことを訊いた。

「怜君、木刀に能力がついているように見えたんだけど」

「ああ、能力は武器に付加できる。ただし、能力の範囲、形は変わらないからな

」

……つまり、僕の能力の形は盾だから、剣を武器にしても盾と重なる部分しか、

能力を纏えない、と言うことか。意味ないじゃん。

そして、天使界へ。



怜君は以前と同じく、天使界ネットワークにアクセスすると、情報を探し始めた

。光秀は、

「お？ 俺にもできるかな」

と言うと手元でまるでキーボードがあるかのように打ち始めた。

すると、空に検索画面が……。

何故だあー。僕は本気で頭を抱えてしまった。

級長はまあまあ、得手不得手はあるから、とフォローしてくれた。

怜君が、何かにきづいたみたいだ。

「奴は天使界を転々としている。今いるのは……、そこか！」

と言うと怜君は光の扉を開き、その中へ入って行った。僕達も続く。

そこは霧の濃い世界だった。何も見えたものじゃない。能力者だから天使界で

だんだんと体が濡れてくる、ということはないものの、六メートル

先がぎりぎり

見えるくらいだ。

「まいったな、これでは何も見えない」

怜君もお手上げらしい。

その時、僕は何かがいるのをぼんやりと見つけ、追って行った。

「待て、翔。単独行動は危ない」

光秀達が追って来た。

「何か見つけたんだ。戒さんかもしれない」

近くまでいくと、大きな蟹、それも五メートルはある蟹だった。視界が蟹で埋まる。

守護者か……。

「気をつける！ 攻撃してくるぞ」

怜君がそう言った途端、右のハサミを大きくふり下ろしてきた。直前までそこにいた、僕と怜君は両脇にそれぞれ避けた。

蟹は連続攻撃してくるかと思えば、霧の中に消えていた。警戒していると、鋭い

音ともに矢のような水が飛んできた。それは凄まじく速く、見えたかと思えば、す

でに光秀に当たろうとしていた。

……が、その時級長が素早く光秀の前に滑りこんで両手でその矢を弾いていた。

源さんにしてもらった遠距離の攻撃をオートで弾くという縛りが、今発動したの

だろう。モンスターの能力（攻撃）も能力で防げるんだなあ。

「あ、ありがとう。美智子」

「いや、体が勝手に。と、いうより疲労感が凄まじいんですけど」

級長が言うにはあと四回も防げば、身体が持たないと言う。とか話している間に

、二回防いでいた。

猶予がない、と思った僕は、能力を使い、とりあえず見たときの場合に蟹を戻し

た。いきなり虚をつかれた蟹は一時的に動きが止まった。

僕は

「怜君！」

と叫ぶと、怜君は無理だ。と言った。木刀が折れるし、能力を纏っ

ても、奴には

もとよりダメージがない。2×0＝0だ。と言っていた。

どうすれば……。

考えているうちに蟹は霧の中に消えようとしている。光秀は飛んだり飛ばしたり

出来る能力……か。

そうだ、重力を使えば。

「光秀、蟹を空に飛ばせ」

光秀はきよとした顔であ、ああ。と言うと、能力のボールを蟹にシュートした蟹は六メートル以上、上がって、落ちてきた。かなりの振動で僕達も揺れたが、蟹には傷一つない。

## 追跡、戒さん（後書き）

みなさん、蟹は好きですか？

筆者は嫌いです。

手強い……というより食べづらいからです。

## 敵か味方が

級長が、

「光秀、あんたも一緒に空に飛んで、蟹を百メートルぐらい上空に飛ばして来て

よ」

なるほど、それなら。

光秀はよしきた、と。蟹とともに上空に上がって行った。そして、待つこと、40

秒。先ほどの揺れとは比較にならない振動が。地震か？　と思うほどのものだった。

蟹を見ると至るところにひびが入っている。

「怜君！」

今度こそ、怜君は能力を纏った両木刀を使い、蟹を粉碎した。

その後、霧が嘘の様に晴れた。怜君が言うには霧は守護者の特性だったらしい。

空はオーロラのようなものが輝いていて地面は滑るほどではないものの、凍っているようだ。他には何もなく、地平線が見える。この世界は今、夜のようだ。

怜君が天使界ネットワークで戒さんの場所を調べていると、僕達の後ろから足音

が。戒さんだった。それと知らない二人。

「戒！」

怜君は叫んだ。

知らない二人のうち、赤髪で髪を真上に伸ばし、バンドを頭につけ

ている男が、

パチパチと拍手をしている。

「パチパチパチ、よくできました」

明らかに魔石が反応している。僕達は警戒していた。赤髪は、

「ハッ、しっかし、こいつら使えんのかねえ、なあ、どう思う？ 条<sup>じょう</sup>」

もう一人の条と呼ばれた180センチはありそうな、白髪の青年は、

「使えない、かな。戒の推薦だから、楽しみにしてたのに。正直、  
がっかりだよ

」

戒さんは

「悪い、条、晴美。見込み違いだったようだ」

と言うと、右手で銃の構えをとり、左手で支える仕草をした。

まさか、戒さん、僕達に攻撃する気？

「そして、悪い、怜、翔君、美智子ちゃん、そして、乱暴な光秀君、  
どうやら、

僕達は仲間にはなれないようだ。くらえ、アクアスプレッド！」

戒さんの攻撃速度は銃の速度と同じだと源さんは言っていた。しかし、外せばそ

この部位が15秒止まって、15秒たつまで攻撃は出来ないと  
も言っていた。

つまり、防御すれば、戒さんは少しの間、無効化できるわけだ。

級長はさっき、疲れたと言って弾を防ぐオートモードを解除してた  
から、つまり

、ここは僕が盾で防御するしかない！

と、思い、僕は瞬時に盾を出した。確か戒さんの弾は一センチだか  
ら、五ミリ四

方で構成されている僕の盾は戒さんの攻撃を防げるはずだ。

……はずなのだが、盾ごしに、にやりと笑う戒さんが見えた。

と、思えば、弾が盾に当たった瞬間、爆発がおき、その爆発は僕達  
四人を包んだ

。

気がつけば、動けなくなっていた。力はあるが、動けない。話が違う。一センチで一発ずつしか打てないはずじゃあ。

「フフ、不思議な顔をしてるね。ま、簡単なことかな。彼は秘霊石を手に入れた

。以前とは違うよ」

条はそう言つと、じゃあ、僕はこれで。と溶けるようにこの世界から消えて行つた。

「僕も、止める力の本気を見せつけたかっただけだから」

と、戒さんも消え、残った晴美は、

「ハッ、俺は遊んでいくぜ」

と、動けるようになるまで15秒、外見とは裏腹に奴は律儀に待っていた。

そして、大声で、

「さあ、楽しもうぜ！」

怜君は両木刀を取り出すと、

「ふざけているのか？ この四人を相手に勝てるだけでも？」

「ハッ、蟹相手に四人でようやく勝てたような奴らに言われたくねえなあ。あれ

、一人でも抜けてたら、お前ら全滅だったろ？」

……確かに、そうだったかもしれない。

「ハッ、それにな、ありじごく戦。」

「いつから見ていたんだ？」

と、光秀。

「そこからさ。ありじごく戦や蟹戦は俺らが仕組んだ。守護者なんて俺らがとつ

くに倒してた」

「なっ……」

僕はそれ以上、言葉が続かなかった。つまり、僕達の戦闘力を見る

ために？

「ハッ、まあ、お前らは弱い。仲間にする価値もない。だが、このままじゃあ、

戒がかわいそうだ、だからな、だから、俺がはかってやる」



## 敵か味方か（後書き）

最近一話から最後まで読んでくれている方がいます。  
筆者、何気に感動しております。

こういう人達が励みになるんだなあ、とつくづく思う  
最近であります。

## 必殺技

晴美はそう言うと、まず光秀に向かってダッシュして来た。奴の能力の範囲は、

固く握られた手の回り、ボクシンググローブのような形をしていた。しかし、間合いの詰め方が尋常じゃなく速い。ボクシングをしていたかもしれない。

い。あつという間に詰め寄り、

「ハッ、一人目、ふごーかつく（不合格）、0点」

光秀にアッパーを食らわしていた。殴られた途端に光秀は、空気の入った風船か

ら空気が抜けるように空に飛んでしまっている。

「ハッ、俺の能力はつまり、暴走させる」

後ろからお助けーという光秀の声が聞こえる。

……、悪いしばらく飛んでいてくれ。

次に級長の元へ。

「二人目、ふごーかつく。まあ、女の顔を傷つける趣味はねえ。また、0点」

と級長の肩に軽くジャブをした。すると級長は地面を少し削って、花に変えたり

、イチゴに変えたり、ジャムに変えたりと三回能力を使うと、ペタンと地面に座

り込んだ。ハアハア言っている。

今日は攻撃を防いだりもしているので、精神的にも体力的にも疲れたのだろう。

次に、僕の元へ。

僕は来る前から盾をだしていた。ので後ろに回りこむことはわかっていて。予想

どおり、後ろに回って来た。

僕は怜君、と叫ぶと怜君は僕の後ろにいる奴のさらに後ろから、両木刀による攻

撃を仕掛ける。その前に僕は奴から一撃をくらっていた。

「ハッ、連携はナイス、20点、だが、ふごーかつく」

と言っている間に怜君に一撃入れていた。速すぎる。

怜君も奴にかすり傷を奴の腹に一発いれていた。ちなみに僕は盾が出たり消えたりを繰り返していた。

「ハッ、どいつも、こいつもふごーかつく、まだまだだな」

怜君の様子を見ると、少しおかしい。他のみんなは暴走したのに、怜君だけ……

よく見ると、クロスしている木刀に濃い緑色の光が行ったり来たりしている。あ

れはもしか、倍にする能力が、行ったり来たりしている？だとしたら……。

晴美は僕の方を見ながら、何か話している、そして、そう思うだろう？ と後ろを

振り向いた瞬間、怜君は、たまっていた力を爆発させ、奴めがけてクロスに両木

刀をぶち当てた。

「加重力ウンター！」

「ぐはっ！」

晴美はその場で倒れた。

「ありがとう、お前のおかげで前に進めた。両木刀をクロスさせ、力を行ったり

来たりさせることで、二倍ではなく、行き来で四倍また、行き来で十六倍となる

必殺技を得た」

晴美は片膝をついて右手を腹に当てると、

「お前……、一体？ ハッ、ククッ、ハッハッハ。成る程な、お前ぎりごーかつ

く。65点。面白い奴、一人いるじゃん。いいところに招待してやるよ。通神閣、これがキーワードだ」  
といい、彼もまた、闇夜に消えて行った。

僕達は、いったん、源さんの元へ帰ることにした。そして、一通り話した後、ぐっすり眠った。

そして、源さんがテーブルに着くと、

「では、これからのことじゃが、どうする？」

ミーティングが始まった。怜君はバンツとテーブルを叩くと

「俺達がすべきことは三つある。まず、何だと思う？」

光秀が手を挙げた。

「はい、トンガリ」

と、怜君は光秀をあてた。光秀は怒るかと思っただが、意外に冷静だった。もう慣

れてしまったのかも知れない。

「戒を追って、世界を元に戻すこと」

「まあ、間違いではないが、それは最後だな」

じゃあ、はい。と級長。

「秘霊石の力を手に入れて彼らを倒せる力を得ること」

「まあ、それも間違いではない。けど、それは二番目」

最後に僕が手を挙げた。

「情報を得ること。まだ何もわかっていないと思う」

「くっ、どいつもこいつも」

怜君は堪忍袋のおが切れたのか、先程よりも強い力でテーブルを叩いた。

「まず、必殺技を会得することだろう」

## 必殺技（後書き）

怜はお気に入りキャラです。よって、強くしてしまいましたが、そんな彼にも弱点が……。

他のキャラも強くしていく予定です。

乞うご期待！

なんちゃって。

## 強くなる資格

一瞬、時間が止まったかのように思えた。いや、確かに止まっているのだが。

源さんがやれやれ、というと、

「ワシが優先順位をつける。確かに、孫は敵で、強くなっているようにじゃ。他に

敵がいるとも限らない。よって、まず、特訓、次に秘霊石、最後に情報を集めが

てら、孫を追う、ででどうじゃ？」

皆、賛成した。

しかし、必殺技ってどうやって会得するんだろう？

源さんは、ワシに任せとけ、それぞれにいい特訓場（天使界）がある、と言い、僕

達は後について行った。

「まず、ここ。オオイヌノフグリによく似た花じゃが、

小さいからと言って侮ることなかれ。特性がある。与えた攻撃を三倍にして返す

、カウンターフラワーじゃ。ここにはたくさんある、怜、お前さんが使うといい

」

「わかった、源爺」

そして、移動する間、光秀が、ちなみにオオイヌノフグリつつーのは実は犬のき

○た○、に似ているからつけられた名前らしい。とウンチクを披露して、級長に

殴られていた。まあ、ピーマンにされるよりいいだろう。

そして、次の場所。

「これは戻り玉」

源さんは直径十センチの白いボールを取り出した。

「この玉は自分の形を記憶している。グーで殴っても、この通り」  
源さんがボールを殴るとボールにはグーの後がついたが、瞬時に、  
ボンツと元に

戻った。

「元に戻る。美智子ちゃんはこれで特訓するといい」

「わかりました」

そして、次の場所へ。

「光秀君はここ」

光秀は源さんに詰め寄った。

「おいおいおい、じーさんよ、ここはじーさん家じゃん」

「飛ぶ、という特異な能力、どんなことができるのか、想像すると  
楽しいじゃろ

う？　ワシは光秀君の想像力に賭ける」

……それって、つまり。

「自分で考えろ、ということか」

光秀は期待が外れたのか、肩をがっくりと落とした。まあ、君の気  
持ち、わから  
なくもない。

そして、源さんは最後の場所へ移動しながら説明してくれた。

「ワシは翔君の能力はおそらく、進化する可能性があると思っています。  
盾に触れ

ていると以前見たものに戻せる能力にプラス、盾自体に付随して  
いる能力が何

かあると思うんじゃ」

「え！？それって、源さんみたいに？」

「ワシのとは微妙に違うが、翔君のはおまけみたいなものじゃろ。  
だがおまけ

にしちゃあ、使えるおまけじゃな。そして、そのおまけの力を引き  
出すには、自

分の能力と話し会うことじゃな」

ん？僕が不思議そうに首をかしげていると、源さんは天使界の扉を開き、僕をそ

こに入るように促した。

そして、中に入ると真っ暗な世界にどこまでも続く一本の光の道があった。

どこからか、声が聞こえてくる。

「わたしは守る能力をつかさどる天使。お前は力を得たいのか？」

「うん」

僕は力強くうなずいた。

「ではいくつかの質問に答えてもらおう。扉を進め」

いきなり、光の扉が道中に出現した。僕はそれをくぐる。

またしても、真っ暗闇の世界。声が聞こえる。

「この娘は」

病院で寝ている静とその病室だ。その部分だけ、スポットライトが当たっている。

「病気で死ぬはずだった。神が定めた運命だ。それをお前がねじ曲げた。何故だ

？」

それは……。

「好きだから、家族だから、死んでほしくないからだ」

僕は虚空に向かって叫んだ。

「それは神を敵にしてもか？」

「当たり前だ！」

先程よりも強く、僕は叫ぶ。

「では、次だ。何故、力を求める？娘だけでよければ、時の縛りから解放してや

ろう」

僕は一瞬悩んだが、悩むまでもなかった。

「それは嫌だ！僕は、いや、僕達は、全ての人達を助ける」



「全てを助ける、と言ったな。私には見える、お前達に待ち受ける過酷な運命を

。神が定めたもう、残酷な未来が。ここでもう、休まないか？お前はもう十分頑

張った。それでもまだ、戦う道を選ぶのか？」

「僕は全ての人が幸せになれる道を選びたい。例えば、お前が諦めろと言ったって

、僕が諦めない、それが戦う道なら、それを選ぶさ」

## 強くなる資格（後書き）

資格といえば筆者は運転免許ぐらいしか持っておりません。あれも、取るのにだいぶ苦労したのですが……。

みなさんはどのくらいもってますか？

それと、評価や感想が欲しくなる今日このごろであります。どしどし応募ください。

なんちゃって。

## 完成、僕らの必殺技

「そうか、わかった。お前はわがままだ。だが、その心に強い意志を秘めてると

見た。世界が救われるのか、それとも……。お前は神（運命）に勝てるのか、見届

けさせてもらおう。そして、今新たな力をお前に授けよう」

その声が聞こえた後、僕は薄緑色の光に包まれ、

「技の名は因果応報。ガードした相手の技を吸収し、返すことができる。また、

相手の技は二つまでストックできる。では行け、勇者よ」

そして、またしても、光の扉が現れ、それをくぐると、源さんの家の前だった。

家はしんと静まりかえっているようだ。何かを察し、後ろを見てみると、

ああ……。光秀がうーらー、と飛んでいた。

何とかマンかお前は、と奴の額をきゅうげきにどつきたくなった。

光秀は僕に気づくと、僕の元に降りてきた。

「光秀、必殺技は？」

「うーん、高速で飛んで、能力を纏った一撃でもいいかなって」

「名前は？」

ジェットパンチ、とにこやかに話す奴だった。

次に、級長のところに二人で向かうと、ちょうど、戻るところだったみたいで、

話しかけると、

「必殺技？　できたわよ。ドリームマジック。二十分以内なら、変化する前の状態に勝手に戻すことができる」

なるほど。簡単そうで難しい必殺技だな。

最後に怜君の元へ。すでに完成しているかと思っていた怜君の必殺技はまだ、完

成していなかった。

怜君に話しかけると、

「以前とは違うことが二つある。まず、あの時はすでに奴にかすり傷程度のダメ

ージを与えていたこと。次に暴走していたこと。最初から必殺技でダメージを与

える方法がわからないのと、暴走させないと、力の行き来がかなり、ゆっくりだ

、ということだ。」

と、難点を話してくれた。十秒で八倍だそうだ。十分使えそうな気がしたので、

それはそれでいいんじゃない？と僕は言ったが、それなら四回、両木刀を当てた

方がいと言う。

僕と怜君があーだ、こーだ話していると、光秀の、

「だったら分ければ良いのか」

と言う声が聞こえてきた。光秀と級長の話は、光秀の髪が、単調過ぎるので、ど

ーにかしなさいよ、という話によるものだったが、怜君は、

「閃いた、ナイス、トンガリ」

と言うと、立ち上がり、カウンターフラワーの前に立った。両木刀を交差させて

力をため（行き来させ）、十秒たった後、左手に能力を固定、右手で縦に勢いよく

、木刀をふりおろしたあと、左手の能力を纏った一撃で、カウンターフラワーを

見事に粉碎した。

僕達はあるけにとられていた。つまり、普通の木刀による打撃の後

に、能力を纏

った一撃、と、役割を分けたわけだ。まあ、最初に能力を倍増させているけど。

「完成だ、加重カウンター。ほら、何、ボケーっとしてる、もう行くぞ」

そして、僕達は怜君について行き、源さんの家へ。

「ほー、みな、必殺技が完成したわけか」

源さんは興味深い、みせてくれんか？　　というので、皆、各自必殺技を見せるこ

とに。見せた後に一人一人にアドバイスをくれた。

「美智子ちゃん後は発想力の問題じゃな」

「翔君は……、悪くない」

「光秀君は改良の余地あり、じゃな」

「怜は、その必殺技でいいのかの」

怜君は問題ない、と言うとさっさとベッドに入ってしまった。僕達もその後、寝る

ことにした。

そして、ミーティング。

「秘霊石についてじゃが……」

と源さんはきりだし、意外な言葉を発した。

「手に入れなくてもいいんじゃないだろうか」

怜君は反発、

「何故だ、源爺」

「秘霊石はな、属性を付加するものや、リミットブレイクを使えるようにできる

ものがあるんじやが、どちらも上級者用のもの、お主らが使うと逆に弱くなる可

能性だつてある。いや、確実に弱くなる。今のお前達だつて充分強い。大丈夫じ

や。戒を追っていきなさい」



## 完成、僕らの必殺技（後書き）

筆者も必殺技が欲しい今日このごろであります。  
ひじぐりぐりアタックとか、横に頭を回転させて  
相手にぶつける、ヘッドスクリュー、とか。

## 怜君の本気

源さんのその言葉で秘霊石よりもまず、戒さんの足どりを追うこととなった。

そして、僕達は例のごとく学校から天使界に入り、怜君が『通神閣』をキーワ

ードに検索していると、

「こ、これは？」

怜君を見ると、眉をひそめていた。

「どうしたの、怜君」

と、僕が訊くと、

「俺宛てにメッセージが残されている。待て、今、読んでみる」

『ハッ、おせえ（遅い）、おせえおせえ。いつになったら来るんだ？ ああ？ 待

たせんのが、上等かあ？ まあ、いい。通神閣を昇ってこい。五

階で待つてる。

」

「それだけか？」

光秀が訊くと、怜君は、

五秒ぐらいしてから、ああ。と答えた。

級長は、閣というからにはタワーをイメージするわね、と言っていた。

僕、階段昇りは得意じゃないんだけどなあ。

怜君が突然、

「ただし」

と言い始めた。何の事かわからずに、言葉の続きを待っていたが怜君はいきなり

、僕達に向かって両木刀を構え始めた。



「お前らを全員倒す事が招待の条件だそうだ」

そんな……。だったら、行かなきゃいいのに、怜君が何を考えているのかわからない。

級長が、

「だったら、行かなきゃいいだけでしょう?」

と言ってくれた。

……が、怜君は、

「俺は奴らに興味がある、残念ながら、な。さあ、全員構えろつ!」  
光秀はフツフツ、と笑うと、

「ちようどいい。前からお前は気に入らないと思ってたんだ、今、  
ここで、倒してやる」

そんな光秀は無視して、怜君は僕に向かって、両木刀を振ってきた。  
左の木刀に能力がついている、とわかっていた僕はまず、右手の木刀による左上から斜めにくる攻撃をしゃがんでよけ、次にきた左手の木刀による右上からくる攻撃は能力

を纏っていたので盾で、ガード、能力を吸収した。

怜君はチツ、と言うと、後方へステップを踏み、四メートル程下がった。

チラツと級長を見ると、オロオロしているだけだ。そのよそ見をしている間に、

お前には打撃の方がいいようだな、と言い、怜君は間合いを詰めて、僕に打撃に

よる二連撃をあてようとしていた。まずい、避けられない、と思った瞬間、光秀が、うーらーら、無視すんじゃない、と言い、ギリギリでジェットパンチを横顔

に当てた。光秀の飛ぶ能力を纏ったパンチで、二十五メートル程、怜君は体制を

崩し、ふっ飛んだ。怜君は、

「なるほど、トンガリ、お前のはかなり、ふっ飛ぶ、だが、威力はない。必殺技

としては0点だ」

僕はもう止めようよ、と言ったが、怜君は嘲笑、ここで止めてどーする、と言う

と、両木刀をクロスして……。まずい、加重力ウンターだ！怜君、本気だ。

光秀が飛んで向かって行き、ジェットパンチを正面からくらわそうとしたが、パ

ンチを能力を纏った左手の木刀で払われると、光秀は大きく体勢を崩し、加重力

ウンターを背中にくらってしまった。光秀はそのまま地面に滑りこんで、倒れて

しまった。今の怜君の左手（の木刀）は大きな力の塊、弾かれて当然か。しかし大

丈夫か、光秀。級長が光秀の元に向かって行った。そして、  
「もう止めて！」

と叫んだ。

……が、怜君は

「安心しろ、倍率は四倍ぐらいにしておいた。まあ、それでもトンガリは立てないだろうがな」

と言い、躊躇なく僕の元に向かって来た。僕は盾を構えていたが、怜君は打撃に

よる二連撃を繰り出した。あ……。怜君は物理と、非物理（能力）の両方の攻撃が

できるんだった。気づいた時には、僕も腹に二連撃をくらっていた。

「かはっ」

かなりの痛みだ、光秀は本当に大丈夫だろうか？僕も動けなかった、動きたくな

かった、これ以上、痛みを伴いたくなかった、だから、気絶したふりをした。

「結局、こんなもんか」

そう言うとき、怜君の声はしなくなった。代わりに綴長の、大丈夫、大丈夫？　　とい

う声が聞こえてきた。

## 怜君の本気（後書き）

特別をつくると、それが特別でなくなってしまう、という話を聞いたことがあるでしょうか？

特別が普通になってしまふ、ということですが、今、筆者は見事にそれにはまってしまいました。

ああ……いままでやったダイエットの成果が……。

## 光秀の考え

僕は目を開いた。怜君はすでにいなく、何故か、級長は無事だった。級長の話を聞くと、僕を倒した後、そのまま、目的地へと向かったらしい。

「あんな男だと思わなかった！」

誰よりも級長は激怒していた。

光秀はボロボロで、いずれ個人的に奴を倒す、と言っていた。

一人では立てないようで、級長の肩をかりて、ようやく歩ける程度のようなのだ。

僕はというと安心したような悲しいような、複雑な気持ちになった。でも、よく考えると、今まで怜君に頼りっぱなしだったかもしれない。もつと強い。

くなりたい。怜君を止めたり、他のみんなを守るように。そう、思った。

いったん、源さんの元へ帰ろう、と思ったその時、僕達の元に現れたのはなんと、晴美だった。

見たことない白いフードを被った女の子を連れて。中学生ぐらいの年齢のようだ。

「ハッ、ザマアねえな。……しかし、女は傷ついてないって。奴もまだまだ甘ちゃんだな」

光秀はボロボロながらも口を開いた。

「何故だ。何故ここにいる、通神閣の五階で待っているんじゃないか？」

「ハッ、誰が俺が待っていると、言ったよ。待っているのは戒だ」  
「戒さんが!？」

僕は思わず、叫んでしまった。

「別に驚くことでもないだろうによ、あとな、俺が用があるのはお前らだ」

と言い、晴美は連れの女の子の、肩を叩いた。

女の子は、フードをさげ、

「初めまして、桐咲愛<sup>きりさき</sup>、と申します」

そして、その桐咲さんは僕の元に歩いて来て、能力の付加された右手で、僕に触

れようとした。とっさに盾を構えたが、桐咲さんの、

「抵抗しないで、大丈夫、悪いようにしないから」

という声の優しさに負け、盾を解いてしまった。

彼女が、僕の額に右手をあてる。すると、なんと、腹が痛くなくなった。どうい

うことなのか訊くと、回復する能力者なんだという。

彼女は光秀にも同じことをすると、

「じゃあ、私はこれで」

と言い、去って行った。

晴美は、おい、後でデートの約束、忘れるなよ、と言い、後にはセクハラです、

という言葉が残った。

そして。

「じゃあ、用意はいいか？」

と晴美は言ってきた。

僕は、

「何を、するつもりなんだ？」

「ハッ、決まっている、第二ラウンドの始まりだ」

晴美が指をパチンと鳴らすと、晴美の隣の空間が歪み、条が出てきた。

「やあ、久しぶり。第二ラウンドの相手はこの僕、と言いたところだけど、天

使界の魔物を連れてきたよ。ま、君達にとってはちょっと厳しい相

手かな」

すると、またしても、条の隣の空間が歪み、モンスターが現れた。条は、

「ガーゴイル、一般的な悪魔の顔と角、翼を持つモンスター、石化できる」

と、補足説明すると、晴美ともども消えてしまった。

また、どこかで見てるに違いない。くっそ、ダメージは回復してもらったが、精神的にきつい。

特に怜君がいない、という点で。

そして、晴美が僕達をオモチャにして遊んでる点でだ。

僕は冷静になつて考えた。今までは怜君が決め手だったが、彼がいない今、決め手は……。

光秀のジェットパンチはただ飛ばすだけだし、級長にモンスターを直に

能力の付加された手で触れてもらうしかない！

と考えている間に、ガーゴイルが飛んで一直線に襲ってきた。

爪による引つ掻き攻撃のようだ、僕の盾では防げない。

避けようと思つたが、両となりには級長、光秀がいる。

光秀はともかく、級長は避けられないかもしれない。

どうしようか、と考えていると、光秀が、

「この戦い、俺に任せろ」

と、言い、飛ばす力の球を蹴り飛ばし、ガーゴイルに

ぶち当てた。ガーゴイルは飛ばされて十メートル程後方に下がった。

そんなに言うなら光秀に任せよう。何か、考えがあるようだ。

## 光秀の考え（後書き）

筆者の最近のお勧めは断然、くんせいたまご、ですね。

もともとくんせいされた物は好きなのですが、くんたまは別格です。  
食べる機会があればぜひ！

……おやじか！



## 必殺、グラビティ・バウンド

光秀は何をするのかと思えば、何回も能力球をあてて、無駄にガーゴイルを飛ばしているだけだった。

……何も考えてなかったな？

ガーゴイルはまたしても光秀に向かって行く、光秀はまたしても、能力球を蹴り

飛ばす。……が、なんと、ガーゴイルは能力球を避けてしまった。

そして、石化

して向かってきた。

見ていられない僕は盾を出し、ガーゴイルを光秀に飛ばされた位置にまで戻した。

ガーゴイルはキョロキョロ、辺りを見回している。

その間に、級長は光秀のところに行き、

「大丈夫？」

と声をかけた。何やら二人で話している。僕も駆けつけると、

「それでいいの？」

「ああ、これで、ガーゴイルも倒せる、俺の必殺技も完成だ」

と、話していた。

級長は空中に五角形を描くと地面を少し削り、鉄の靴へと変化させた。

光秀は右足にそれを履くと、飛んだ。重くないのか、と訊くと、鉄靴に

も飛ぶ能力を付加させているらしい。

……と、ガーゴイルが石化して再び向かってきた。光秀は飛んで行き、ジェット

パンチをあてた。キックじゃないのか？

そして、後方へと下がったガーゴイルはなんと、さっきはずした能

力球にあたり

、光秀の元へと、すごい勢いで戻ってきた。

……石化したままで。

光秀は横に一回転すると、ガーゴイルの頭めがけて右足の鉄靴をあて、見事に粉碎した。

……のだが、蹴ったとたん、石の破片が光秀に行くことはわかっていたので、ガーゴ

イル全てを、光秀が蹴った後すぐに、光秀のはずした能力球のあった位置にまで

戻した。当の光秀は石が飛んだり消えたりして驚いていた。

光秀はこっちに来て、

「悪い、助かった」

と言った。僕は、ツメが甘いよ、と言い、級長は、

「全く無茶するわね」

ヒヤヒヤしたわ、と言っていた。

そして。

「必殺技の名前はもう決めたぜ」

僕は一応光秀に訊いてみた。

「何？」

「マツハキック」

うん、やっぱりセンスのかけらもないな。

級長は重力っぽいからグラビティ・キックにしたら、と言っていた。うーん、もうひと押しだな。

「グラビティ・バウンド」

後ろで声が聞こえた、と思ったら、晴美だった。条もいて、ひたいに手をあててやれやれ、と言っている。

どの面下げて戻ってきたんだ、全く。

「ハッ、こいつで決まりだろ」

級長は、この人達の言うことに耳をかさない方がいいわよ、と言ったが、光秀は

「か、かつこいい」

目をきらきらさせながら言うのだった。……どうやら、決まったようだ。

条は、

「光秀君はまあまあ、だね。翔君のフォローも悪くないかな。ただ、美智子ちゃ

んはね……、まあ、オマケってことで」

級長は何よ！　と、敵意むき出しにしていた。

晴美は、ハッ、と言うと、

「条は甘いな。まあ、リーダーがそう言うなら、お前  
らも招待してやるよ、行け、通神閣へ。そして真実を目の当たりに  
してこい」

級長が、何で名前や能力を知っているの！　と訊くと、晴美は一  
言、戒に訊いた  
、とだけ言った。

僕はちよつと、待って、と言うと、何でお前らは僕達をはかつてい  
るんだよ、と

聞き、晴美を殴ろうとした、が簡単によけられ、晴美達は消えて行  
った。

消える際に、

「行けばわかる、戒に訊けよ」

と聞こえた。

そして、これからどうする、という話になって、光秀は怜を追おう、  
と提案した

。級長は源さんに連絡した方がいいんじゃない、と言った。僕は、  
「怜君を追おう！もしかしたら、戒さんと戦闘になってるかも知れ  
ないし、今じ

やないと、戒さんはいないような気がする」

光秀は天使界ネットワークに接続し、通神閣と、検索し、通神閣へ

の扉を開いた

。僕達はそれに入って行った。

## 必殺、グラビティ・バウンド（後書き）

最近急激に冷え込んできましたね。

みなさん、風邪には十分気をつけて

お過ごしください。

なんて、たまにはまじめなことも書く  
筆者でした。

ちなみに光秀の必殺技の名前は、友達に  
考えてもらいました。

筆者もネーミングセンスがないもので。

グラビティ・バウンド！

かっこいいですよ。これからも光秀君  
には活躍して欲しいと思います。

そして、随時前書き更新中です。大体三話ごとに更新していますの  
で、

よければ前書きも見えていってください。

## 戒さんの想い

気づくと、僕は小学校の体育館ぐらいありそうな、広い建物の中にいた。窓の  
ような穴がいくつかあり、そこから光が差ししている。円形フロアの  
中心には人の  
四倍はありそうな、猪が倒れていた。たぶん、天使界の守護者だろ  
う。後ろには  
劣聖石があった。

僕は

「怜君が倒したのかな？」

と、訊くと、光秀は、

「……だろうな」

と答えた。級長が、何か見つけたみたいで、壁をじっと見ている。

「どうしたの？」

と僕が駆け寄ると、突然、級長は、

「人々は平和に暮らしていた」

と、話し始めた。よく見ると、壁に短く文字が彫られている。その  
すぐ近くに二

階へ続く螺旋階段があった。

「二階にも何か書いてあるかもしれない、行ってみましょう」  
と級長がいい、僕はついて行った。

二階にも階段の近くに文字があり、

光秀が、

「突如、世界の均衡を崩すものが現れた」  
と、読んだ。

僕は三階へ急ぐ。

「その者、魔王。世界を滅ぼす者なり。強大な力とともに、それは  
現る」

と、僕が読んだ。

四階へ。

「その呪われしものの名は」

この階はここまでしか彫られていなかった。

と、突如、

「うそだ！」

という声が上がから聞こえた。僕達は急いで五階に行くと、怜君が

「ウオオオオオ！」

と、両木刀を構えながら、戒さんに突進していた。戒さんは

「アクアスプレッド！」

と、言い、銃の構えをしていた右手から、弾丸のごとき速さで、能力弾を打ち出

した。怜君には当たらなかったが、近くの地面にあたったそれは爆発し、怜君を

包みこんだ。

すると、怜君は止まってしまった。

「怜君！」

僕は叫んだ。戒さんは、

「無駄だよ、前と違い、時を止めたから。後十秒ぐらいはね」

光秀が何か言おうとしたが、戒さんは、

「おっと、こっちの要件を先に聞いてもらおうか。まず、選別した理由、それは

、魔王を倒す人数を絞るため。

弱い奴はいても足手まといになるだけだからね。

近々現れる魔王とは、人類のみならず、地球上の全ての生物を滅ぼす存在とされ

ている、そう、未来に現れる絶望の象徴だ。

僕と条、そして、晴美は大学サークルの仲間だね、未来の天使界を見つけたんだ。

その天使界から未来に行くこともできた。そこは、絶望的だったよ。

あんな、未来にさせない為、ちょうど、一年前、僕はとある、強大な力を見つけ、手に入れた。

神聖石と同等、もしくはそれ以上の力を。

その力を使い、ようやく現代の時を止めたってわけ。

くしくも、魔王と似た力を使ってしまったが……。

でも時が止まるのも、もう終わる。

……とにかく、時間がないんだ、魔王を倒すのに協力してくれるね？」

怜君はいつの間にか、動けるようになっていて、

「だからと言って、あんなことが出来るものかっ！」

と、叫んでいた。

「そうか、残念だ」

戒さんはその後、壁によりかかり、カハツ、と血を吐いた。

「僕が死ねば、時は戻る。後は、君達次第だ」

級長はキヤー、と叫び、僕と光秀は戒さんの元へ向かった。光秀は

戒さんを背負

って運ぼうとしたが、さすがに重いようだ。足取りが重い。僕も手

伝おうとした

が、

「待ってくれ、今、救急車を」

「フフツ、時が止まってるのに、どうやって呼ぶ気だい、乱暴な光秀君」

あ……。

死ぬ前に、と、戒さんは僕に能力を撃とうと構えたので、とっさに盾を出した。

「それでいい。翔君、美智子ちゃん、乱暴な光秀君、後は頼んだよ。僕じゃ、ダメだった、救えなかったんだ」

と言うと、能力を撃った。僕の盾は放たれた能力を吸収した。

その後すぐに条と晴美が現れた。条はしんみりした声で、僕は覗く



能力者なんだ、

今まで、君達の情報を盗み見てた、悪かったね。と言った。

戒さんは僕の必殺技を知っていたから、今撃ったのかもしれない。

そして、晴美は

「ハッ、笑えねえなあ、笑えねえ」

といいながら泣いていた。糸もまた、悲しそうな顔をして、

「彼は返してもらっよ。愛なら、治せる……とまでいなくても、痛みをやわら

げることは出来るから」

と言うと、光秀の背負っていた戒さんを背負い直した。

僕は、彼らが去る前に、

「どうしてこうなったの？」

と訊くと、晴美が、

「全ての時を止めた代償は安くなかったってこった。それだけ戒はお前らに賭け

ていた、賭けていたんだ」

と言い、去って行った。

## 戒さんの想い（後書き）

戒のことはだいぶ悩みました。  
本当にこれでいいのだろうか？  
と。

作中のキャラを殺すということに筆者も悲しく  
なりながら書いた今回の話でした。

## 決意を胸に

彼らが去った後、僕達も一旦、源さんの元に戻ることにした。怜君が僕達を裏切  
つてまでして得た情報を聞き出さないと、ね。それに、戒さんが命を賭けて倒そうとした魔王って？

そして、僕達に魔王を倒せってことなのかな？

みんな、それぞれの想いがあるらしく、帰りは誰も話そうとはしなかった。あの

、光秀さえ。

源さんに今までのことを話した。

「孫が……。そうか」

と、下を向いていたが、顔を上げ、

「翔君達には、ぜひとも戒の意志を継いで欲しい。人とそれに携わる全ての生物

の命がかかっている。お願い、できるかな？」

僕はノー、とは言えず、はい！ と頷いた。

光秀も、俺に任せろってんだ、と言い、

級長は、あまりノリ気ではなかったが、私に出来ることなら、します。と、言っ

ていた。

怜君は、顔を横に向けると、馬鹿げてる、といい、布団の上に寝てしまった。

仕方なく、僕達も寝ることにした。

起きた時、怜君はあの時何を話したのか、話してくれた。魔王は三日後、十年後の未来からやってくること。

魔王も能力者で、世界を滅ぼす程の力を持っているということ。

世界の時を止めたのはより、多くの強い能力者を集めるため、だそうだ。

そして、集めた仲間は僕達の他に二人、いるらしい。条と晴美、愛さんを除いて

。

いろいろ、話している間に条と晴美がやってきた。

「戒は……逝ったよ」

と、晴美は悲しげな様子で大学時代の戒さんの話をしてくれた。条も、

「戒が、これ、おじいさんにつて」

と言い、腕時計と、手紙を源さんに手渡した。

「お、お、お」

と源さんは泣きながら手紙を読んでいた。

僕が、一人にさせてあげよう、といい、時も戻ったし、一旦、解散、ということ

になった。

時間は七時、暗くなっていた。家に帰ると、両親に宿題ぬけ出してなにやってた

！と怒られた。忘れてたよ、本当に。えーい、時よ、止まれ、と思っただが、止ま

るはずもなく、時は刻々と過ぎていった。

そして、源さんが、三日間は休みなさい、たまには静養も必要じゃ、というので

、魔王がくるまでの間、休むことにした。三日後、学校生活を楽しんで少しした

頃に、あるニュースが流れた。

「緊急速報です。現在、地球に向かって、いまだかつてない大きさの隕石が落ち

てくるとの、連絡をうけました。隕石は複数あり、地球全土を包み

こむとのこと

です。落ちてくる日は後日、詳細をおって連絡いたします。あ、今スーパーコ

ンピューターによる計算が終わったようです。え……、なんと、今日です。五時

間後に地球の生物全てが死に絶える程の隕石が降ってくる模様。繰り返します、

……」

僕は呆然と、ニュースを見ていると、級長が家にきた。

「ニュース、見た!？」

僕はうん、今、見ていたところ、と答えた。級長は、これが魔王の仕業だとした

ら、……とんでもない奴ね。と、言っていた。とりあえず、みんなと合流する為

、源さんの元へ向かった。源さんの家には、光秀や、怜君又、条や晴美がすでに

来ていた。

源さんが、

「予期していたことが起こってしまった。悪いが、わしは持病でここを離れられ

ない。みな、後はよろしく頼む!孫の手紙によると、場所は宇宙。魔王は何らか

の力を持って宇宙を天使界化している。天使界から入れるはずじゃ」  
晴美が、

「ハッ、とうとう来やがったな、ぶっち(ぎり)で倒してやるぜ」  
と言い、級長は、

「できることをできる限りやります!」  
と言い、光秀は、

「ま、俺がいないと魔王は倒せないよなあ」  
と言い、条は、

「僕は、遠くから観戦させてもらつよ、愛と一緒にいるから、疲れ  
たら、僕がワ

ープして、回復してあげるから。あ、僕は覗いたところにワープも  
できるんだ。

……ちなみに、残りの強力な二人だけど、遅れてくるみたいだ。」  
怜君は終始黙ったままだった。

僕は、ごめん、思いつかないや。と言い、みんなは笑っていた。

みんながはりきって、外に出ていった後、怜君と源さんはまだ家の  
中に残っていた。

## 決意を胸に（後書き）

筆者、パソコンのとあるRPGをしたいのですが、今のノートパソコンじゃ

増設やグレードアップしても、できないらしいのです。

あゝ、新しく買おうかな？でもまだお金が……金欠の筆者でした。

次回、波乱の予感、お楽しみに！

## 波乱の予感

怜君は、

「あんたの考えていることはわかっているぞ、源爺。翔を殺すつもりだろっ！」

そうはさせるかっ！と言い、僕の前に立ち、源さんに向かって両木刀を構えた。

え？ え？ どういうこと？

源さんは、フッフッフ、と笑うと、

「殺しはせん、法に触れるからの。だが、それに相応することは受けてもらう。」

気づいてしまったのなら、仕方ない。怜、お前にも受けて貰うぞ」

源さんの目は本気だった。何が、どうなって？

源さんは、能力を発動、気づいた時には、

「奥義、時縛り」

という声とともに、目の前が暗くなった。

目を開いた時、家はなかった。それどころか山もだいぶ潰れ、山と呼べるのか

どうかも疑わしい。どこを見ても荒れ地で、木なんか一本もない。

地面はひびが

入っているところが多数あり、もう少しで砂漠になるんじゃないか、と思わせら

れる。変わってないのは空だけだ。

何故、こんなところに僕がいるのかわからない。しばらく、ボケーっと、空を見

ていると、源さんに、何かされたのを思い出した。

その影響でこうなったのだろうか？

怜君も源さんの攻撃を食らったはずだが？



と、辺りを見回しても、怜君はいなかった。  
仕方なく、歩きながら考えることにする。

まず、いつ、どこでというのは大事だ、と思ったが、この世界、人の気配が全く

ない。家すらないのだ。当然かもしれない。

僕は、いつかもしかかもわからないところでのたれ死ぬのか……。  
おじいちゃん

、しずかぁ。急に家族が恋しくなった。

しかし、怜君はどうなったのだろうか？

僕が生きてるってことは怜君も生きていたに違いない、と思う。じやあ、何故い

ないのか？

考えられるのは、怜君は違う世界に行った、とか、おんなじ世界だけれど、目覚め

る時間帯が違った、とか……。しか思いつかないな。

どちらにせよ、絶望的だ。なぜ源さんは僕を殺そうとしたんだろう？  
次から次へと疑問が浮かぶ。

いろいろ考えているうちに、遠くに薄緑色のものが見えた。

あれは！

近寄ってみると、天使界への扉、異界の扉だった。

ここは、地球なのか？ と、思い、とりあえず、扉の中に入ってみることにした

。中に入ると、なんと、太古の植物が生い茂っていて、家がたくさんあった。

どうやら、集落みたいだ。集落の真ん中にでかい恐竜の骨らしきものがある。

周りで子供達が遊んでいる。付き添いの大人の女性がいたので、いろいろ訊いて

みようと、あのか、と話しかけたが、その女性は、

「え……」

と言うと、その後、女性は驚くべき言葉を口にした。

「翔？」

……、髪はロングだけど、あの顔立ち、まさか、級長？

「待ってたわ」

女性は何事もなかったかのように、そう言った。僕は、何がなんだかわからない

がとりあえず、わかっていることを説明した。

「そう。実は紺城君にすでに事情は聞いているの」

「怜君に！？」

級長は、説明してくれた。ここは僕からすれば未来の天使界だということ。

この天使界は僕達の小学校のあの、天使界だということ。

魔王によって、地球は滅ぼされたが、一部の能力者によって、一部の人は各地の

天使界に住んでいるということ。

僕は、一番重要なことを聞いた。

「って、ことは、みんなは？」

「そう、察しの通り、戦いに敗れ、死んだわ、みんな」

……。

級長の話は続く。

怜君は僕より先にここに来て、級長の話聞き、力を求めて秘霊石の洞窟へ入っ

て行ったということ。

「私は彼に伝えたわ。この時代から出るにはこの時代の神聖石を手に入れるしか

ないってね。後、彼からの伝言、秘霊石の力を手に入れたお前を、神聖石の眠る

地で待ってる、ということらしいわ」

「級長」

「ねえ、美智子さんって言うてくれない？私、もう大人だし、級長

でもないし」

「美智子さん、僕、頑張るよ」

その後、美智子さんに勾玉のようなネックレスをもらい、それをつけてもらった。

なにやら運命をかえる力を持つ石らしい。

かつこいいかな？　へへっ。

僕は美智子さんに怜君とは別の秘霊石の洞窟への扉（異界の扉）を開いてもらい、

この地を後にした。ありがとう、と美智子さんに言い残して。この天使界を出る

間に、

「頑張って。ゆう〜であり、ま〜でもある〜あなたには無限の可能性〜あるから

」

途中、よく聞きとれなかったが、気にすることなかった。

## 波乱の予感（後書き）

クライマックスと見せかけて、まだ続く、みたいな、よくありがちな手ですね。

筆者、してやったり、と、にやついております。

まだもう少し続きます。最後までお付き合い、なにとぞよろしくお願ひします。

## 真実、そして僕は

中に入り、階段を下るとひとつの部屋だった。500ヘイホウメートルはあるだろう

か。階段はない。光源は何かはわからないが、部屋は白い光が照らされているよ

うな感じだった。

……何もない。周りはゴツゴツした岩ばかりだ。

とりあえず中心に行くと、頭の中におごそかな声が聞こえてきた。何者だ？

「今河翔、と言います。秘霊石の力を手に入れる為に来ました」  
帰れ。お前には力を与えられない。

「お願いします。魔王を倒す為に必要なんだ！」

魔王を倒す？そうか、回りの奴は教えてくれなかったのだな。

「え？」

魔王は、お前だ。

「え？ うそをつくな、僕は僕の世界を壊したりしない！」

未来のお前、という表現が正しいか。未来のお前は、とあることから人類に復讐

を覚え、悪魔の石の中でも最上級の、邪影石を使い、未来の技術や能力者に簡単

には勝てない、とふんだお前は過去を滅ぼすことで、未来を変えることに決めた

のだ。思い出せ、友人等の様子がおかしくはなかったか？

「あ……」

そういえば、通神閣の五階に書いてある、魔王の名前、見るのを忘れていた。怜

君はあそこから、様子がおかしかった。源さんは戒さんの手紙を読  
んでから、僕

を殺そうと思った？

戒さんや、他のみんなを殺したのは、僕だった？

自然に、涙が流れていた。僕は、

「それでも僕は、僕を倒す。僕がしたことは、僕がケリをつける」と、大泣きして鼻水をティッシュで拭いながら、言った。

倒したと、してもだ。大人になったお前は過去を必ず襲うだろう。その時、今のお前に倒されるのだぞ。

「それでもかまわない！ 仲間が死ぬよりましだ！ そして、怜君を止められな

かった時のような無力感はどうたくさんだ！」

そうか、しかし……ん？ その勾玉、特性がついているな。真意は……変化、か

。うむ、試してみる価値はある。

「え？」

ならば、力で示せ。力なきものは結局、想いを達成できん。

いきなり、ドーンと言う音とともに、ドラゴンが現れた。四本足で炎をはいて、

翼がある巨大な爬虫類型モンスターであり、ゲームで大人気のあれだ。ちょうど

、でかいドラゴンの真下にいた僕はそのままじゃ、踏み潰される、  
と思い、端へ  
と走った。

端に行くとかかるのだが、この部屋、ドラゴンが一回りでき、なおかつ人が

一人入れるスペースしかない。つまり、狭いのだ。部屋が狭いのか、  
ドラ

ゴンがでかいのかは……、いや、ドラゴンがでかいんだな。

ドラゴンは耳の鼓膜が破れる程の咆哮をした。

僕は両手で耳をふさいだ。びりびりと感じるドラゴンの威圧。勝てるのだろうか

？いや、勝たなきゃいけない。

ドラゴンはず、炎のプレス攻撃。首を大きくしならせての一撃は  
圧巻の一言に

つきる。もちろん、盾でガード、吸収したが、ドラゴンかっこいい。  
僕はワクワク

クしていた。カメラがあつたら、夢中で撮っていたかもしれない。  
プレスが利かなかったのか、ドラゴンは爪での引っ掻き攻撃に  
変更してきた

。これは盾で防げないので、夢中で右に左に転げ回った。  
引っ掻かれた後の岩を見て、ゾーっとした。見事にえぐりとられて  
いる。

くらったら、まず死ぬ。

しかし、動作が遅いので、くらうことはない。

ドラゴンはこれも無駄だとわかったのか、尻尾を振り始めた。何を  
するのか、と

思っていたら、尻尾を振り回すテイルアタックだつ、と気づいた時  
にはすでに目

の前に尻尾がきており、尻尾の端が足にあたり、勢いよく岩に叩き  
つけられた。

「ぐはっ」

朝に食べたものをリバーシそうになった。

スピードの速いテイルアタックだと思ったが、尻尾の端、というこ  
とと

、部屋が狭い為、尻尾が壁にあたりながらの攻撃、ということ、  
まだ、何とか

大丈夫のようだ。激痛はするが、もう、弱音は言ってられない、僕  
は強くなるん  
だ！

真実、そして僕は（後書き）

ドラゴンといえば、もう少しで筆者の待っていたゲームの発売です。  
いやー楽しみですな。  
楽しみです。



## リミットブレイク

しかし、どうやって倒そう？　　今、僕にある力は、見たものを元に戻す力。そして、

盾でガードした能力を吸収する力。

吸収した能力を二つまでストックする力。

そして、今ストックしている二つの力は、倍にする力と止める力。これらの力でどうやってドラゴンに勝つか……無理だ！。

まず、僕は止める力を指先から弾丸のように、打ち出し、ドラゴンの時を止めた。

十五秒、考える時間を得た。

アクアスプレッド、と、口に出して言ったが、実際に出たのは、能力弾

一発で爆発もしなかった。ちょっと恥ずかしい。吸収し、ストックした能力は少

し、劣化するらしい。どうするか。

怜君の倍にする力を出してみた。木刀一本分の能力刀だった。盾と木刀や盾と弾

は同時には使えないようだ。

じゃあ、能力刀と能力弾は？

結果、出来なかった。

両方出すことはできたが、能力弾を発射すると、能力刀が消え、能力刀を壁に

当てると、能力弾が出なかった。一度に一つの能力しか使えないらしい。

なら、能力を合体して一つの力として使えば？

僕は右手の能力刀と左手の能力弾の力を練り合わせ、合成するイメージを創った

。すると、両手には日本刀のような、長い能力刀が握られていた。

新しい能力の発現だった。ドラゴンの時も動き出し、尻尾を振っている。

テイルアタックだとわかっていた僕はドラゴンの真下に潜り込み、能力刀を突き

刺した。

……が、何も起こらない。どゆこと？

僕はすぐさま端へと走るとドラゴンは爪で引つ掻き攻撃をしてきた。攻撃を避けてからドラゴンをみると、明らかに先ほどより、しわが入っている。

？　　どういう能力だったんだ？

その後、ドラゴンは弱々しく咆哮すると、倒れ、十秒もすると、骨だけになった。

。

つまり、時を止める＋倍にする＝時を急激に加速するだったのか。能力刀はドラゴンに刺しっぱなしだったから、倍にする能力がどんどん進んで、

こうなったのか。我ながら恐ろしい能力だ。

だけど、やったぞ。一人で。僕はガッツポーズを決めた。

その後、どこからか、またしても声が聞こえた。

よくやった、光と闇を心に持つものよ、私は、神の意志を継ぐもの。今ここにそ

なたに新たな力を授けよう。

と、聞こえると、中心に四角い光る台座が出現し、僕はそれに触れた。

すると、僕の体が薄緑色に光り、新たな力を手に入れた。

声は言った。

そなたに少し説明しよう。上位の能力には属性がつく。火は水に強く、水は木に

強く、木は土に強く、土は火に強い。この通り、四属性があり、火、

水、木、土

はそれぞれ、侵食（だんだん強くなる）、広域（広がる）、増殖（増える）、封印（弱め

る、無効化）の真意がある。先の能力の合体したあれば、火の属性になる。そして

、今、手に入れた力、リミットブレイクは土の属性。

名をリバウンド・ゼロ、という。

反復させない、つまり、一度戻したことをもう、二度と起こさせない技だ

。基本的にリミットブレイクは一日に一回しか使えない。よく考えて使う時を選ぶのだな。

「源さんに、秘霊石はリミットブレイクか属性かどっちゃかって聞いたんだけど」

そなたの場合、リミットブレイクだったというだけだ。そして、リミットブレイ

クは上位能力、つまり属性がつく、それだけのことだ。質問は以上か？　さらば

だ、光と闇の力を持つものよ。

と聞こえると、光に包まれ、気づくと、美智子さんのいた天使界に戻っていた。

あの集落へと行くと、美智子さんが待っていた。

「おかえり」

「ただいま」

少し、話をした。

「そう。あの時地球を襲って来たのは、未来のあなただったの。なすすべもなく

やられたわ」

「そうだったんだ」

「あなたを倒せるのは、あなたしかいないと思ってる。頑張ってるね」

そして、怜君は先に神聖石の眠る地へ向かったという。僕も休む間もなく、美智

子さんに異界の扉を開いてもらい、その地に向かうのだった。

## リミットブレイク（後書き）

最近、有名な小説やマンガを読んでいます。同じ、人、という人種が書いていないんじゃないかって程の完成度にびっくりします。やっぱり、経験や知識の絶対量が少ないと、ああはいかないと思います。

筆者があのか域に達するには……。  
何十年かかるのかなあ。

## 決意を胸に・真

異界の扉をくぐり抜けると、そこは、洞窟の中みたいで何かの結晶がところどころにある、とても神秘的な場所だった。怜君が一番奥でたたずんでいた。

「怜君！」

僕が呼びかけると、怜君は前を向いたままで、

「はめられた」

と言い、続けて、前を見てみる、翔。と、言った。

僕が前を見ると、巨大な石があった。五角すいに五角柱をたしたような石が五本

、横に並列され、大きさは真ん中が一番高く、横にいくにしたがって小さくなっていた。

「これが……」

「そう、神聖石だ」

怜君は、だがな、と続けて「力を失っているんだ」

「え？」

良く考えてみる、と怜君。何故、俺達の時代で神聖石は誰も手に入れられなかったのかを。

たのかを。何故、伝説とされていたのかを。それは、情報が、全くなかったから

だ。天使界で検索しても、反応すらしない。

あの女（美智子さん）は、この場所を知っていて、俺達をここに導いた。つまり、

誰かが神聖石の力を手にした後だったんだ。

「え……」

僕は言葉が続かなかった。なんて言えはいんだろう？このまま未

来で過ごして

いくしかないのか？

「その通りよ」

後ろで声が聞こえたと思ったら、美智子さんだった。怜君は、

「どういっつもりだ！」

と、つつかかった。

美智子さんは冷静に

「どういっつもりでもないわ。この時代に、戒さんが来たことがあつてね」

「え？」

そう言えば、戒さん、そんなことを言ってたっけ。

「この箱を過去からくるかもしれない、勇者につて。この場所でないダメなよ」

うに縛つてあるみたい。源史郎さんも一枚かんでいるかもね」

怜君はチツ、そういうことか、あのじじい、と悪態をついていたが、僕には良く

わからない。

美智子さんは、私にはどうやって何も起こらなかった、と言っていた。

しかし、箱を触っても何も起こらない。

美智子さんは、

「戒さんから何か、残されたものはない？」

「何も……」

怜君がもしかしたら、と言った時、僕も思い出した。時を止める能力、これしかない。

そう思い、一応、怜君の手をとって、箱に能力弾を撃ち込んだ。すると、目の前

の光景がぐらぐらと曲がり、（その際、美智子さんは手を振っていた）気がつくと

、源さんの家の中にいた。

あれはタイムマシーンだったんだろうか？ 戒さん……。

急に僕は悲しくなった。そして、

みんなはいなかったが、源さんは一人そこにいた。源さんは、  
「戻ってきたか。土産はもってきたんじゃない？」

僕と怜君は顔を見合せ、

「もちろん」

と言った。

今がいつなのか訊くと、今さっき、みんなが魔王を倒しに出ていったばかりで

、今、僕と怜君に奥義を使ったばかりだと言う。怜君は、

「こうなること、わかっていたな、源爺」

「まあ、の。ただ、あのままじゃ、君らが見た未来の通りになるのはわかつとつ

たんでな」

そして源さんは、みんなには、二人はトイレで遅れる、と言っておいたから、早

く行っておやり。と、なんと爆弾発言をした。

あれから十分は、たっている。

急いで外に出ると、みんなからトイレ長いぞ、とのブーイング。

怜君はなんと

かごまかしていたが。

僕は決意を決めた。

真剣な顔で、

「みんな、訊いて欲しいことがある、魔王は、未来の僕なんだ」

最初は光秀、級長はからかっていたが、晴美や条達が下を向いているのを見て、

さとつたみたいで、急に空気が重くなった。僕は言葉を続ける。

「地球を守るためなんてかつこいいことは言わない。けど、大事な人を守るため



、未来の僕を倒すため、今の僕に力を貸して欲しい！」

晴美が、

「ハッ、何だ、もう覚悟は出来てんのか。まあ、俺がぶつちで（未来の）お前を倒

すのは変わらねえがな。」

条は

「えらいよ、翔君。君なら、出来る気がする」

愛さんは

「サポートは私に任せて」

級長は僕の背中を思いつきりたたき、

「私、今の翔に味方するからね」

光秀は僕の左肩に手をおき、

「ま、未来の根性曲がりのお前を正してやろうぜ」

怜君も光秀とは反対側の肩に手をおき、

「俺の力でよければ、いくらでもかしてやる。……翔、準備はいいか？」

と、それぞれの言葉を僕は受け、僕達は今、

「じゃあ、行こう！ 僕達の物語を終わらせるために！ そして、必ず倒そう、

新しく紡がられる未来のために！」

出発する。

## 決意を胸に・真（後書き）

もうそろそろクライマックスです。

翔と魔王はどんな結末をむかえるのか、

そして、残りの二人とは？

そしてそして、地球やみんなの運命は！

次回、最終回、涙のあとに、乞うご期待！

なんちゃって。まだ題名やラストにするかは決まっていなくて、  
筆者、最後にかっこつけました。  
すみません。

度々すみません。怜と翔の言葉を忘れていました。  
更新しましたのでよろしく願います。

## 踏みしめていく、その先に

僕達は学校の天使界から、宇宙、魔王、未来からきた等で検索、場所を特定した

。月の近くらしい。異界の扉をくぐったが、そこは宇宙ではなかった。

ただただ平らな地面と空、山があるのみの世界だ。晴美が、

「ハッ、こいつぁ、異界の扉の転送ルートがねじ曲げられてるな」と、言い、その直後、

「気をつける、魔石が反応している」

と、怜君の警告とともに、いきなり、何の音沙汰なしにウ〇ト〇マンくらいの大

きさはあろうか、という、ゴーレム（レンガの巨人）が現れた。

「あんなのありかよ！」

光秀は驚きのあまり、腰を地面についた。

「勝てる気がしないわ」

級長も額を手でおさえている。

晴美が、

「なーに言ってたんだ、お前らには魔王を倒してもらうんだぜ。調べたが、魔王

にたどり着くまでに一つの道のりになっているらしい。だが、道のりは短いとみた！

ここは俺に任せて先に行け！ 後を、頼んだぜ」

そう言くと、晴美は右手をかざして異界の扉を開いた。

級長が、でもっ、こんなの一人で勝てるわけじゃない、と言い、光秀は、行こうぜ、翔、魔王を倒すんだろ、と言い、怜君は、どうするんだ、翔

？

と言った。僕は、

「行こう、晴美の死は無駄にはしない」

途中、死んでねえよ、という声が聞こえたので、後ろを振り向くと、巨大ゴーレ

ムが右足で晴美を踏みつけようとしていた。

「晴美！」

怜君は叫んだが、間に合わず、晴美は……。かと思ったら、ゴーレムの右足が破裂した。

重心を崩したゴーレムは右前方に倒れそうになっている。って、僕達の

方に倒れるー！ 早く行け、とのみんなの声に押されて、次の天使界へと入って

行った。その際見た、後ろの光景は、右人差し指を天につきだしている殺し屋、

デスと、しりもちをついているが、グッジョブの合図をとっている晴美だった。

ゴーレムの右足は再生しかけていたが、あの二人なら。僕はなんだから安堵した。

そして、次の天使界。

山が噴火し、地面にとこるところ亀裂があり、亀裂から、溶岩が流れているそんな世界だった。

「気をつけて、魔石が反応しているわ」

と、級長。その直後、突然、さっきのゴーレムと変わらない大きさのドラゴン、

それもとこるところにアーマーを装着しているドラゴンが現れた。

……めっちゃ

かっこいい。怜君は、

「アーマード・ドラゴン、神々に使える神獣だ。何故ここに」

そのドラゴンは、大きく息を吸い込むと、小さな山ぐらいはありそ

うな火球をはいてき

た。盾で吸収しようとしたが、巨大すぎて、一度に吸収しきれない。終わりかと

半ば諦めていた時に現れ、炎を斬ったのは、薫さんだった。

炎を僕達の逆から斬ったようで、盾を避けるように火球は飛んで行き、

後に爆発した。

「薫さん！」

僕は声をかけた。

「ここは私に任せろつといいたいところだが、一つ、子供た……いや、翔、お前に聞きたいことがある」

僕が首をかしげていると、

「お前の覚悟はっ！」

「必ず、未来の僕を倒す！　そして、みんなで幸せな未来を掴みとるんだ！」

薫さんはフツと笑い、

「少々、お前をみくびっていたようだ。さあ、行け、後に勇者と謳われる者達よ

。もう、用はないっ！」

と言うと、次の光の扉を開いてくれた。

僕達は今度は迷わず先に進んだ。薫さんなら、信頼できる。そして、最後に見た

、薫さんが、ウオオオオオ、と、ドラゴンに突っ込んでいく姿は、後々まで、僕

の目に焼き付いていくことになる。

そして、異界の扉をくぐると、そこには、妖艶に光る赤い月を前にして、僕達に

背を向けている魔王がいた。

白いスーツを着て、背も高い。180近くありそうだ。これが魔王。

僕はいろんな思いを馳せながら、とうとうその名を叫んだ。

「魔王！」

魔王はゆっくりと振り向くと、

「魔王だなんて、仰々しいな、お前は僕だぞ。まあいい、僕と怜、美智子に光秀

、メンツはそろっているようだ。しかし、君達は知っているかい？  
これからの未

来が二通りあることを。一つは君達が僕に負けた場合の絶望の未来、  
もう一つは

僕がいた未来だ。どちらにせよ、救いはない。諦めないかい？」

## 踏みしめていく、その先に（後書き）

あゝ、ラストが近い注意報です。

終わったら、どうしようかっていう

不安感が強くてなかなか次の話が進んでおりません。

しかし、終わるとなると、本当に寂しいしだいでございます。

終わりよければ全て良しということわざもあるように、

ラストは重要なんだと思います。

よく考えて作っていききたいと思います。

筆者、頑張ります。

ちなみに、前話、セリフを一部変えたので、もう一度、見てやってください。

## 戒さんの意識

僕は、

「諦めるもんか、お前を、倒す！」

と言った。魔王は軽く溜め息をはくと、

「そうかい、他のみんなは？」

光秀は魔王を指さして、

「翔は好きだけど、お前は嫌いだ！」

と言い、級長は大きな声で、

「私は、今の翔を信じる」

と言い、怜君はあざけるように、しかし、冷静に、

「フツ、未来のお前は馬鹿だな、翔。お前を倒すためにここまできたんだ」

と言った。魔王は、

「そうか、なら仕方ない。我が力、存分に思い知らせてやろう」

そう言くと、魔王は右手を右へ左へまるで指揮者のように振り始めた。

僕達は身構えた。怜君がまとまってるかとやられる、散れつと言ったが、その時、

魔王は、四人に分身していた。

「邪影石を手に入れた僕の力は二つある。一つは想像を実現する力。つまり、夢

を現実にする力だ。もう一つは……出すまでもないな。僕、四人相手に、勝てるかな？」

四人が同時に話す。とても不気味だ。

光秀は

「一人一殺でちょうどいいな」

ツツコミたくなったが、その通りだし、今はそれどころではないの



で、目の前の

魔王に全神経を集中した。僕の前にいる魔王は再び手を振る。すると、遠くから

凄い音がして、何か、キラッと光るのが見えた。

僕は反射的に盾を出した。すると、盾にぶつかり、爆発し、

僕はそれを吸収した。

僕が瞬きをしていたぐらいの時間だったが、高速、いや、光速で何かが飛んできたのだ。

「そう、小隕石だ」

魔王がそう言った時、次々と音があちこちからしたので、このままでは全滅だ。

躊躇してる暇はない、と思い、

「リバウンド・ゼロ！」

リミットブレイクを使ってしまった。僕の体と盾が一瞬、炎のように緑色に煌め

いたと思ったら、すぐに戻った。

魔王は

「くつ、夢を実現する力にリバウンド・ゼロ、だと！？　力が出せない！　なる

ほど、地球への隕石もこれで、止められた訳だ。僕の野望、こんなことで止めら

れるとは」

怜君が

「おかしい、さっきから奴の体をすり抜ける」  
級長は

「分身だからじゃない？」

と言っていたが、魔王は、

「そうではない、元々が、意識体なのだ。肉体など、邪影石の力を手に入れた時に持っていた」

みんな、びっくりしたみたいで、動きが止まった、僕もだ。

級長は、

「幽霊！？　そんなの、勝ちようがないじゃない」

魔王は、だからだ、と、手を振り、左手を額にあてて、

「この時代では僕の勝ちが確定していたはずなのだ……なのに。なんてな。フツ

、クク、クツクツ、ハーツハツハツハツ。隕石はすでに私の手を離れ、軌道は確定している。もう一つの力でも、お前らをほふることは十分できる」

魔王達は、ハアアアア、と力をためている。その間に、光秀のグラビティバウ

ンドを当てよう、と思ってもすり抜け、級長も同じ。

怜君は、試してみるか、と言い、怜君の加重力ウンターももちろん、効果なかった。

どころか、力の行き場を無くした倍にする力は怜君自身に暴発した。「怜君！」

僕達は近寄ったが、胸に凄いいざが出来ていた。怜君は片膝をついて、

「心配するな、しくつただけだ」

しかし、心配するな、という方が無理つてもものだが今は、魔王を倒すことが先決

かもしれない。僕も、時を止める力と倍にする力を合成、覚悟を決めて、時を急

激に加速する力の能力刀を魔王にあてよう、と思ったが、すり抜けてしまった。

どうすれば……。

魔王は

「永遠に夢を見させる奥義、これで、終わりだ！」

ここはどこだろう？広い草原に、風が吹いている。

なんだか気持ちがいいや。僕はそこで寝ることにした。しかし、目をつぶってか

らすぐに声がした。

「君は、それでいいの？ 未来を、幸せな未来をつくるんじゃない

かったのかい？

「

はっと目が覚めた。戒さん、確かに戒さんの声だった。隣を見ると、

どうやら、

みんな同時に目が覚めたようだ。

## 戒さんの意識（後書き）

ああ、わが子が離れていくような感覚を覚えます。  
次でラストです。

## 魔王の末路／未来へむけて

魔王は、

「馬鹿なつ。僕の秘技から逃れる術などハツ、もしや、先程のリバウンド・ゼロ

の余韻が……しかし、封じることが出来なかったようだ。今一度使えば済む話

」

魔王達は再び、ハアアアア、と力をため始めた。

怜君は、

「さっきの夢で、思い出した、奴の能力はなんだと思う？」

「どういうことだ、怜」

光秀は訊いた。

「つまりだ、翔、奴を倒せるのはお前しかない！何故なら、奴の分身能力は増

殖、つまり木属性、勝てるのは水属性しかない。つか、勝てると

したら、ここ

しかないっ」

みんな頷いた。しかし、ん？ 待てよ。

「でも怜君、僕は火属性の技と土属性のリミットブレイクしか持っていないよ。リ

ミットブレイクは使ってしまったし」

怜君は人差し指をたてて、いいか、と話しはじめ、

「戒からもらったものがあつたら？」

「でもあれは劣化して……」

怜君はだからだ、と言い、……何が言いたいんだろう？

「戒の意識をここに呼び寄せる、天使界は意思の力が強く作用される、と源爺に

ならったな？」

あつ。

「四人で強く念じれば、戒の力を使えるかもしれない。いいか？」  
魔王はまだ力をためている。

「わかったわ」

「任せとけ」

「うん、わかった」

僕達は固まって、手を合わせた。（僕は左手を）

戒さん、今一度、僕達に力を！

「くられ、アクアスプレッド！」

指先から出たそれは、紛れもなく、完璧なアクアスプレッドだった。  
弾丸の如き

の速さで魔王にあたったそれは、爆発、魔王全員を包みこみ、魔王  
は消滅してい  
く。

「おのれえええ、翔！しかし、地球は滅びる、今からそれを想像す  
るのが、楽し

みだ。そして、未来にお前も倒される運命だ。覚えていろっ！」

と、言って消えていった。級長が見届けた後、

「ああはなりたくないわね」

と言った。

僕は恥ずかしくて下を向いて、そうだね、と言った。

その後、薫さんや、殺し屋、晴美が来て、敵は倒していたが、隕石  
をかたずける

のに手こづった、すまない、といって来た。つまり、終わったのだ。  
その後、いくら戒さんの技を使っても、アクアスプレッドは出な  
かった。

そして、源さんに報告したり、三浦さんに報告したり、じいちゃん  
に報告したり

、帰ってからが忙しかった。

病院に行き、静とずっと話をしたりもした。光秀は夏休みの宿題を遅れて提出したものの、今までの冒険を書いただけなのに、素晴らしい出来だと先生に言われ、金賞をとっていた。なんか、ずるい。ちなみに、戒さんの遺品であるタイムマシーンは僕の机の中に眠っている。

来年、四人ともみんな同じ中学に入り、夏休みになった。今、その四人は源さん家に集まっている。

「じゃあ、約束どおり、神聖石は先に見つけた方のものだな？」  
怜君は確認している。美智子は、

「ルールがあります。悪用はしないこと」

「あつたりき」と、光秀。

「うん、いいよ」

と、僕。

「では、よい、スタート！」

級長が手をたたいて、みんなが走り出した。どこに向かうのかはわからない。し

かし、誰かが見つけるのだ。僕は、もちろん、僕の未来を、運命を変えるため。

「見つけた、神聖石」

触れると全身が濃い緑色に光った。

「僕の願いは、リミットブレイクを一時的にかなり強化して欲しいってこと」

これでよし。

「リバウンド・ゼロ」



## 魔王の末路／未来へむけて（後書き）

終わりました。とうとう、終わりました。

かなり、寂しいものや悲しいものもあるものの、完結できた、という達成感もあります。

ラストは筆者にとってはいい出来だったと思うのですが、どうだったでしょうか？

次なる作品に向けて努力したいと思います。  
今まで、ご愛読、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2128h/>

---

いしの力

2010年12月12日16時05分発行